地名研究会報

第４１号
平成６年３月６日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第４１回例会　平成５年６月６日（日）　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・江平　望・納　栄蔵・郡山政雄・小川亥三郎・片岡八郎・小園公雄・西　昭三・能勢正之・長谷川順一・花園正志・浜崎盛雄・肥後芳尚・平田信芳・藤浪三千尋・松田　誠・松浪由安・村上良典（計１８名）

Ⅱ．麑藩名勝考読会　P.138 ～ P.142

（話題となった事項および地名）　録音失敗－－－記録なし

曽於国府と桑原国府

平田信芳

大隅国府については、『和名抄』に「久波々良国府」とあることは知られていましたが、それが何処にあったかについては従来追求されませんでした。桑原郡(くわはら)、これは天降川から西にあったわけです。ところが大隅国府があった所は国分市府中で、これは曽於郡の境域になります。府中の地域が桑原郡であった時期があると考えれば、曽於国府と桑原国府は別の呼び名になるのですが、郡界が移動したということも考えにくいのです。

資料の(1)、和名抄・色葉字類抄・拾芥抄の要点を書いておきました。和名抄は10c.前半に成立しますが、これには「久波々良国府」と出て来ます。色葉字類抄というのは二巻本、三巻本、十巻本とがあり、三巻本に「桑原国府と曽於府」とが書いてあります。14c.の拾芥抄には「曽於府」が書いてあります。ですから、12c.頃から以後は曽於郡に国府があったとみなされます。

それ以後については史料を出しておりませんが、「国衙ニ引水口」とか「国衙守公神」とか「国分まくさた」などの史料が数多くありますから、府中に大隅国の国衙があったことは確かです。それに大永七年(1527)、大隅国守護代本田董親が大隅正八幡を焼打ちしたことによって公家方の勢力が壊滅しますが、その時点が大隅国府の最後になると思います。府中の大隅国府が滅亡するのは1527年であるとはっきりしているのです。

府中にあった曽於国府がどの時点まで遡ることが出来るのか、そして桑原国府がどこにあったかを突きとめることが出来たら、桑原国府から曽於国府に移った時期がどれなのかという問題がはっきりして来るわけです。これらについては国学院大学の木下教授が和名抄・色葉字類抄・拾芥抄に記されている大隅国府の表記が違っていると指摘されており、早くから問題提起がなされているのです。

今年の 2月27日・28日、木下教授が大学院の学生と小川先生の親戚に当る橋村君と共に、薩摩国と大隅国の駅路の調査に来ました。それに同行して薩摩国の駅路と大隅国の駅路を２日間一通り通ってみました。新留峠にもよじ登りました。

また一昨年、奈良女子大学の武久義彦教授が科学研究費をもらわれて大隅国の駅路を調査されています。蒲生から姶良町にかけて前郷川という川があり

ますが、その左岸に古代の駅路跡がきれいに残っていることを航空写真で解析されたのです。その上で蒲生駅を上久徳の禁中という所に比定されました。

その禁中を見て、蒲生の町長さんに禁中が蒲生駅という論文が出ています、と。コピーを入れて送ったら、すぐさま蒲生町教育委員会から返事が来ました。実はそこに工場が出来ることになり、明日から確認調査に入るとのことでした。トレンチを入れた結果は、南側の大半はシラスの面まで削られているとのことでした。その後、協議が進められて５月末から２週間の予定で発掘調査に入るということでしたので、現在調査に入っていると思われます。部分的に残った遺構が全部調査されるという段階になっており、どんなことになっているのか情報待ちしているところです。それはとも角としても、蒲生駅の候補地の一つとなるわけです。空中写真によって蒲生駅ではないかという説を出されたわけで、遺構的に確認されたわけではありません。削平された後なので非常に微妙なところになっているわけです。

小園　禁中というのは何処？

平田　早馬です。早馬という地名も駅馬(ハヤマ) と結び付いて来るだろうし、それから禁中はちょうどいい台地です。一町ぐらいの広さの台地ですが、北辺部しか残っていないのです。そこは全面調査をするということです。それはとも角としても、武久論文で指摘された前郷川の左岸の古代の道路の跡は実にきれいに残っている。これを見た後、これを延長していけば、どこかで桑原郡衙のそばを通るのではないかと考えたわけです。

今日配った会報37号の資料の中にある石清水文書「往古大路宮坂麓」という史料と長門本平家物語の記事。これは小園先生が紹介・提起された俊寛たちが流されて来た道になるわけです。これらにもとづいて去年巡検に行ったわけです。私は気が付かなかったのですが肥後先生がとられた写真に「宮坂橋」と出ていました。橋に「宮坂」という地名がちゃんと残っていたわけです。肥後先生、あすこの手前の橋ですね。

「往古大駅宮坂麓」という地名を考えると、曽於国府から天降川を大津で渡って鹿児島神宮の方に行く。そして宮坂を登って鹿児島女子大の方に登る道が昔の駅路であったということが、この石清水文書で確認できるわけです。

そこで、この駅路を生かすとすると、桑原国府はこの駅路から外れたところでなければならない、という発想になって来たわけです。加治木か帖佐に桑原郡衙（桑原国府）がなければならない。曽於国府が都合が悪くなって桑原国府に移ったのだろう、という想定を立ててみたわけです。加治木で一番都合の良さそうな所は、加治木館の北の方にある安国寺あたりなんです。ところが、あすこは縦貫道が通っておりますから、縦貫道調査で必ずひっ掛かったはずなのに、それがひっ掛かっていないとすると、見逃したか。それはあり得ないことなので、帖佐城以外にないと考えたわけです。そういう前提のもとに帖佐城跡に出掛け、遺物の散布状況を確かめることにしました。奈良・平安時代の須恵器・青磁類の散布が見られました。そして広さも郡衙として適当な広さですし、それから三方、山に囲まれています。広さは、東西三町から四町近くありますし、南北でも六町近くありますから結構広い。そして、その郡衙域を東と南の方に、門前川(もんぜんがわ)という川が囲んで堀のようになっている。そして帖佐城の背後の山に八幡神社があるのですが、そこに山城があって「平安城」という名が付けられている。これは平安時代の重要拠点だったに違いないと思ったわけです

それから新聞では書きませんでしたが、資料の２枚目の方に建久図田帳の田数が引用してあります桑原郡とみられるものの田数です。桑東郷が 189丁です。万膳とか松永とか武安という地名は現在の地名と共通するものです。それから桑西郷の見当をつけさせてくれるものは溝部在河 2丁、小浜村 8丁などが出て来ます。隼人町から溝辺町にかけてが桑西郷であったことが判ります。これが 156丁ですね。それから帖佐郡が 371丁とあります。これは内容を計算すると 220丁 8反になりますが、それでも最大の面積を占めます。それから蒲生院が 119丁、吉田が18丁。加治木が 121丁、横川院が39丁と田数が出て来ます。この中では文句なしに帖佐が一番大きいわけです。したがって、平安時代、田数の上でも群を抜いているということは、帖佐に桑原郡衙があったとみなしてもよい。桑原国府帖佐説の補強材料になるのが、建久図田帳の田数だと考えます。

帖(ちょう) というのは国衙の庁：国庁から変化した地名と考えることも出来るわけです。『日本地名総覧』で「ちょう」という地名を探すと、資料の(2)・(3) になります。鳥取県の国府町に「庁」という地名があります。因幡国の国庁をそのまま写した地名です。富山県小矢部市に「町」という地名がありますが、これは「町の変形？」と書いてあります。長郷・丁田・丁の坪という地名もありますが、これらは意味がわかりません。ただ姫路市は播磨国府の所在地ですし、鳥取県岩美町も国府町の隣です。福岡県筑後市、これは羽犬塚あたりで筑後国府の隣接地になります。筑後国府は久留米にありましたから、その近辺にある地名だということになります。有力な裏付けではありませんが、「ちょう」というのは国衙の「庁」とみることができます。また、帖佐の「佐」は南九州に多い地名語尾ですから、地名から国庁と結びつけることも不可能ではないわけです。建久図田帳の田数からみても桑原郡の中心地とみることが出来る。そのようなことで桑原国府は帖佐ではないか、あとは現地を掘って遺構を確認すれば良い、と考えた次第です。桑原国府の突破口が出来たと考えている次第です。

普通はこう云った席で研究発表をし、それから論文を書いて、その後に新聞記者などに発表することになりますが、段々年令をとって来ると何時ぽっくりいくか判らんし、交通事故があって（笑い）、折角の分析が謎になっても勿体ないと思ったので、ちょうど文化部のデスクが 4月 1日付で代りましたので、栄転の記念にこういう論考はいかがと送って載せたわけです。このあとゆっくりデータを集めて大隅国府は移動していたという論文を書けばいいわけです。

そこで二・三日前から、大隅国関係の年表というものを整理してみました。 699年、三納城と稲積城を修す、と。「修」というのは、どうしても修復とか修築という意味にとれるのですが『続日本紀』の解説書などは初めて造ったと云ってますけど、それより以前に出来ておったことも考えられる。三納城も稲積城も所在が知られていませんが、三納という地名は西都市のすぐそばにあります。日向国府に附随する城だとみてよいわけです。それから稲積城は稲積郷というのがありますから、桑原郡の中のどこかになければならない。和気清麻呂が流されて来るのは 769年ですけれども、『三国名勝図会』や『薩隅日地理纂考』によると、和気清麻呂を世話したのが稲積老という人物であることになっています。稲積の伝承があったと思われます。溝辺町竹子下宮神社の祭神は「稲積神」と溝辺郷土誌に書いてあります。稲積郷、稲積神そして稲積老などがあの辺に固まっていますから、あの近辺のどこかで稲積城をつきとめなければいけないわけです。

それから稲積城から成長して来るものが、大隅国府であってもいいわけです。今後、稲積城は探さねばならない大きなテーマの一つであるわけです。これはだいぶ以前から云っているのですけれどもなかなか探し出せません。

大隅国が 713年に設置されますが、これは薩摩国

の設置より十一年ばかりおくれているわけです。ということは、大隅隼人が大和朝廷に対して最後まで抵抗したということになるでしょう。設置した次の年、714 年の記事も脱けていますが、豊前国民二百戸が大隅国に移住させられているわけです。これも重要な事項なので、追加しておいて下さい。さらに移って来た直後に、大隅国守楊侯史麻呂が殺されるわけです。楊侯史麻呂が殺された国府がどこであったのか、それは判りません。国分であったかも知れませんし、それ以外の所であったかも知れません。今までの史料では確かめようがありません。

740 年、藤原広嗣の乱をあげておきましたが、これにも隼人が加わっております。征討に来た官軍の中にも隼人がいて、恐らく鹿児島弁で、その頃は鹿児島弁とは云わないのでしょうが、隼人の言葉で俺たちの方に来いと誘って味方につけた。それで広嗣が敗けてしまうわけです。

そういう騒ぎの中で国分寺建立の詔が出ますが、大隅国分寺については 756年から 820年の間に建ったと思われます。というのは、756 年に28ヵ国の国分寺が建ったので、その祝いの幡を政府から支給されております。肥後とか日向の国分寺の名前はあるのですが、大隅国・薩摩国の名前が出て来ません。756 年には大隅国も薩摩国も国分寺が出来ていなかったとみなされています。820 年に出来た弘仁式には大隅国分寺と薩摩国分寺の名が現われて来ますので、考古学的には大隅国分寺の建立はこの間だったとみなされるわけです。現在石造層塔が建っている地域が大隅国分寺跡ですから、大隅国分寺跡のそばに本来の大隅国府があったことは間違いない。したがって奈良時代には曽於郡に国府があったと考えてよいわけです。

それから大隅国関係の年表ではっきりしているのは菱刈郡の創設が 755年ですね。さっき『麑藩名勝考』の記事で天平勝宝七年(755) の間違いだと指摘しましたが、この年になります。この後の律令残篇に大隅国は五郡を管郡するという記事があります。大隅国設立当初の四郡と菱刈郡とで五郡という見当がつくわけです。そうなって来ると桑原郡の設立は 755年の菱刈郡の創設から 804年。というのは、あーまた、 804年が脱けていますね、大事な史料が。桑原郡蒲生駅との間に楪野駅を設置するという史料が 804年です。これも付け加えなければならない史料です。この間に桑原郡が出来たという見当がつきます。

そこで、桑原国府というのは大ざっぱに見積って755 年～ 804年に桑原郡が設置されてから曽於国府というのが見える時期、それが桑原国府が存在した時期だと思います。

曽於国府が都合が悪くなって桑原へ移らねばならなくなった理由というのは何か。よく判らないのですが、大隅国府にとって大変な出来事は 8世紀末の噴火が一つあるかな、ということが考えられます。一つは 764年に鹿児島信爾村の海で三島が生起したというもの。その後、大穴持神を祀るわけです。これが大穴持神社の起源になると思います。それから 788年の霧島の噴火。しかし、噴火があったからと云って国府がつぶれるというのもおかしい。火事か何かがあって致命傷を受けて暫定的に桑原郡衙に国府を移したということは考えられる。それが和名抄に見える桑原国府でしょうから、10世紀の承平年間には和名抄が出来ていますから、10世紀の前半には桑原郡に国府が移っていたとみなければならないわけです。

ところが年表を見て判るように、804 年に蒲生駅の記事があり、824 年、多禰島司を廃止して大隅国につけた記事があった以後は、10c.11c.とほとんど記事がないわけです。10c.～11c.は大隅国については手掛かりとなるようなものはほとんどありません10c.中頃には藤原純友の乱が起こりますが、これが

大隅国・薩摩国とどのように関わったかよく判りません。恐らく関係があったと思うのですが、史料的にはつかまえることは出来ません。

11c.になって来ると、税所篤如が下向して来る話や、それから1029年の事件などが出て来ます。これは小右記にある記事を、ラサール高校の永山さんが紹介したものです。平季基が大隅国府を襲って国庁・守館・官舎それから藤原良孝の住宅を焼き払っているという出来事があるわけです。恐らくこれは曽於国府ではなくて桑原国府を焼き払ったのではないかと思うわけです。その後に曽於郡の方に国府を移転するという計画になるのではなかろうかと思うのです。

1026～1029年、これはどういう頃かというと、藤原道長が死んだ直後のことですから、藤原氏がぐらつき始める時期にこういう騒ぎが起こったことになりますす。平季基が島津庄を開くわけですが、平季基が焼いた大隅国府がどこであったかということは今後考古学的につきとめなければならない課題です。桑原国府を掘るのは、そう云った意味から興味が出て来る問題になります。恐らく11c.初めに焼き払われているわけですから、完全につぶれた跡が考古学的に出て来るのではないかと思います。11c.末になると、院政が始まります。

さて、1132年、宮坂麓の石躰に八幡が現われて、宇佐八幡と大隅正八幡が八幡の本家争いをするわけです。この宮坂から北に上る道、ちょうど現在の縦貫道と並行していたと思われます。一致している所があるかも知れませんが、ここに「往古大路」があったと思うのです。今になって気が付くのですが縦貫道の調査をするとき、溝辺の空港からずーっとあの線上に遺物の散布地がつながっているのです。遺跡がつながっていたのです。遺物は出て来るけれども遺構が見つからない。こんな遺跡があるのですかと道路公団の人に皮肉られながら調査をしましたが、古代の駅路に並行していたわけですから随所で神を祠ったでしょうから、神祭りに使った坏や椀などの破片が散布していたと思うのです。今考えればそれが縦貫道の遺跡の調査だったのかなと思ったりするわけですが、縦貫道と並行して北に上っていた道が駅路であったと思うのです。それが1132年には「往古大路」というふうになっていたわけで、12c.には駅路でなくなっていたことになります。

大路があったとすると、曽於国府の時代に宮坂を通って北にのぼって行く延長上に大水駅がなければならないということになるわけです。小園先生が唱えられた島津駅と大隅国府を結ぶ道路：官道、これは島津庄が開かれてからクローズ＝アップされて来る道だろうと思うのです。それが俊寛たちが流されて来る道になります。したがって、延喜式・和名抄に出て来る大水駅は、最初の曽於国府とつながる駅と解釈する必要があるのではないか。まぁ、そういうことです。

その次に、1142年、大隅国分寺石造層塔が造られています。それと同じ型の石像、藤浪さんが見つけたもの。あれは肩に書いてあったのかな、康治元年と書いてあったのは。これも1142年ですね。それらの形式から考えると、隼人塚と云っている正国寺石造層塔、これも大体1142年頃に建てられたのではないか。そうすると、1142年頃の石造層塔が国分・隼人に集中しているということは、この段階で曽於国府が復活して、直後にこういうものが設けられたのではないか。そういう見当を付けたわけです。そのような記念物だと考えるわけです。

そうすると、右側の (2)曽於国府から桑原国府へ移った時期、これは確かめようもないのですが、和名抄の時期以前に移っているとは云える。

次に、桑原国府から曽於国府に帰って来る時期を確かめるために歌枕を眺めたらどうだろうかと思ったのです。大隅国に歌枕が集中していますが、桑原

国府の周辺には歌枕はないのです。曽於国府周辺には、嘆きの森、景色の森。その他に、こがの森、景色の浜、夕暮の森などがあって、一つずつ歌った作者の時期を調べなければならないのですが、そこまでは手が回っていませんので嘆きの森・景色の森だけを出します。嘆きの森については讃岐という女性が歌ったものが最も有名です。「ねぎごとをさのみ聞きけむ社こそ、果ては嘆きの森となるらめ」。これは 9c.末。それから清原元輔という人は、10c.末ですから、嘆きの森というのは 9c.末〜10c.の頃に盛んに使われた歌枕だと云えます。清原元輔と和名抄を結びつけると、この頃曽於国府が廃止されて悲しいことになったのかなということになります。駄じゃれみたいに結びつけるのは、あまりしたくはありませんが、ちょっと違っている時期です。

景色の森は待賢門院堀河の歌が有名ですが、この女性は1145年に亡くなっています。西行法師は12c.の人ですから、景色の森が歌枕として宣伝されるのはちょうど12c.中頃ということになります。1142年の直前に曽於国府が営まれるようになっていたのであれば、景色の森が宣伝される時期にも合って来ます。

まぁ、思い付きをぱっと云って後からデータを集めるという方式ですが、桑原国府は帖佐城跡に求めて行けば都合よく解釈が出来るのではないかと思うのです。そうすると蒲生駅にも桑原郡衙は近いわけですし、それから帖佐城の平安城という名前も気になる地名です。今後あすこはチャンスがあれば調査したいなと思っております。それで考古学的に遺構を確かめたら動かない説になるのではないかと思うのです。私が気付かない問題点があるかも知れません。ご指摘頂けたらと思います。

要約すると、大隅国府には曽於国府と桑原国府の時期がある。曽於国府は府中、桑原国府は帖佐城跡だ、と云える。最初の曽於国府は府中の所であったか、国分寺近辺であったのか、それはまだ判らないということです。まぁ、古瓦が出て来ることを考えると、府中という気がするわけです。それ以外の所も瓦が出て来る可能性もあるわけですから、国分中央高校から国分高校あたりにかけては未だ何が出て来るか判らないということです。

（質疑応答）

藤浪　石躰宮の裏をあがって行くのが古代の官道ということですが、桑原国府があったという帖佐の方に行く道筋とのつながりはどうなるのですか。

平田　この官道は1132年、12世紀には廃れているわけです。だから隼人塚の所で南に行く俊寛が通った道と、あすこで直行する道路があるわけですね。野久美田の方にずーっと行く道があって、加治木のあれは、滝のーーー。

藤浪　滝口坂。

平田　滝口坂ですか。滝口坂を越え、加治木館の前を通って、湯湾岳の麓まで真っ直ぐ西に進んで天福寺の磨崖仏に出る道があるでしょう。それから帖佐城の所へ出る。だから、桑原国府とつなぐ道は野久美田・小浜・加治木の通りではないだろうか。それと、これが新聞に出た直後、池畑君から電話が来ましてね、文化課が加治木町で干迫遺跡というのを掘ったのだ、と。郡衙クラスの遺構が出たのだそうです。これをどう解釈したらよいか、と。それは日木山屋形と解釈する以外にないのだろうと思うのです。加治木郡司の屋形だろう、と。ものすごい量の遺物が出ているのだそうです。

小園　加治木はいわゆる県主の勢力がおりますからね。

藤浪　治安元年(1021)に税所篤如が来た時、この頃は桑原国府はどうなっておるのですか。

平田　桑原国府は、もう移っているでしょう。

藤浪　向うの方に移っているという意味ですか。

平田　桑原国府になっている。

藤浪　向うの方に。治安元年の場合は、1021年。

平田　まだ桑原国府だろうね。

藤浪　税所氏は、多分、国衙の役人になっているのですね。居城を重久の関の坂に構えているわけです。そこら辺に当時の重要な要素があると思うのですが。それからもう一つ、正八幡：鹿児島神社の勢力というか神宮領がある。加治木を考えた場合に、神領地であったわけですけど。帖佐は何かそういう総社的な神社の存在とか、その辺は？国府の側には一つの大社、八幡神を祀ったという説があるようですが。どこにも八幡はあるわけですけど。

平田　結局ね、大隅国の官人も桑原国府は一時的なものとしか考えていなかったのではないかな。曽於国府にいつか帰ろうと思っていた。だから国分寺とか鹿児島神社とかね、そういうものは全部こちらの方にあるので、こちらに帰るチャンスを待っていたと考えられる。基本的には曽於国府という考え方で桑原国府は一時的なものであるわけです。神社の数からみると、小さな神社は周りの沢山ありますよ。大きなものを育てられなかったということでしょうね。

藤浪　それと、当時の天降川の境界がどうなっていたのか判りませんが、どうやら天降川の向うが曽於郡に入り、こっちが桑原郡に入ってますよね。郡界のゆれというのがあるような気がするのですが、そこら辺は？

平田　郡界のゆれがあったら、全然国府は移らなかったということになるよね。

藤浪　そこら辺で中央の官人の受取り方が。

松浪　帖佐の「帖」は、「てふ」じゃないでしょうか。畳何帖という場合。答西(とうせ)、以前先生が関わりがあるようなことを云われたような気もするのですが。あとはみな「町」や「長」ですよね。ちょうさの「帖」は「てふ」のような気がするんですけど。「帖」の発音は、あまり意味はないかも知れませんが。むしろ「たぶせ」とか「とうせ」とかそっちとの関わりがありそうな気がします。

平田　帖佐ですか？

松浪　振り仮名を付けた時の「答」は「タフ」

平田　タフセ。トウセ（答西郷）でしょう。

松浪　「答」は「タフ」。

平田　タフ？

松浪　帖佐の方は「テフ」でなかったかと思うのですが。

平田　「テフセ」ですか。

藤浪　それと、もう一つ。国府が移った場合に、国分寺も移る？

平田　それは、ないと思う。

藤浪　ないですか。国分寺別当を桑幡氏がつとめているようです。系図をみると、別当をやっているようです。その関係はどうなのかなと思って。

平田　私が云いたいのは、国府の主流は曽於国府で、桑原国府は一時的なものだということです。

藤浪　そうすると、和名抄と色葉字類抄の時期ですかね。いわゆる 937年から1180年ぐらいまでになりますかね。

平田　色葉字類抄の三巻本で「曽於府」と出て来るでしょう。この時期は曽於国府に帰っていたと思わなくてはいけない。そして和名抄に桑原国府とあるから、桑原国府をわざわざ書き加えた。だから二つになったと思うのです。二つ書いてあるということは、色葉字類抄の頃には曽於国府に帰っていたからだと思います。曽於府という情報をつかんでいたから、こういうのを書いたと思うのです。

小園　桑原国府というのを帖佐にしないで、現在の日当山とか、あるいはその対岸あたりに考えられないか。あれも桑原郡だから。

平田　うーん、それで、真孝（新国府）という説が出て来るのかも知れないけどね。

小園　それでは、何故帖佐に移らねばならなかっ

たのか。そういうものがあったのか、ということをはっきりさせなければならない。何故あちらに移らねばならなかったのか。桑原郡というのは、豊前国から移って来た人たち。四〜五千人ぐらいが分布していたと考えられるわけですから。そうすると何か重大な政局の変化があって、そちらへ移った。それが見つかればいいんですがね。桑原というのはどうなんだろう。曽於国府をあるいは桑原国府と云うたのか。曽於国府から桑原国府へ移ったのじゃなくて同じものの呼称の違いではないのか。

平田　うーん、そうしたら、郡界が変ったということだね。

藤浪　郡界がね。

平田　それを証明できたらいいんだけど、これはちょっと難しい。

藤浪　藤井先生の真孝（新国府）説、あすこに当れば桑原国府もおかしくないわけですよね。考古学的に確認されていませんけど。

平田　いわゆる平安時代の四禽図に適うという、北に山、東に川、南に海、西に道、ということを考えたら、隼人町は都合のいい所なのです。だけど今まで軒並みと云ってよいほど工事をやったわけですね。しかし何もひっかかっていないよね。

藤浪　今ですね。

平田　ひっかかったかな。

藤浪　松木園という所があるんですよ。青木神社の前の方にですね。あすこで舶来の湖州鏡が出たり刀子とか白磁の完形品なんかが出たのですよ。まだ可能性はあったのですが、緊急工事で止むなく中止しました。それと、四つの神社の配置ですね。青木神社が南面して南の鎗島神社と向きあっている。中山神社が東面しています。それと東の方にも神社があれば都合がいいのですけど。平安時代の遺物がまだ発見されていないわけですが、そういうことが考えられないか、というーーーー。

平田　そういうことでね、確かな情報を待っているのだけど。というのは薩摩国に13の郡衙があり大隅国には８つの郡衙があったはずなんだけど、これらは一つも確かめられていないわけです。そして、どんどん開発に伴なう調査が進められて、あぁこれが薩摩郡衙の跡だったとか、これは揖宿郡衙ではなかっただろうかとかね。あるいは阿多郡衙ではと、片っ端からね、開発が優先してしまって郡衙がつぶされていくわけです。こういうふうに桑原郡衙ではないかと先に云ったのは、郡衙というものをもっと大事にしろという意味が言外にあるのです。そうでなければ、郡衙なんてのは残らない。例えば千迫遺跡という郡衙クラスの遺跡が出て来てもあまり知らされないし、整理にまだ数年はかかる、と。埋文センターが発表した時は、もう何もないということになる。そんなことでは困るという思いが強いわけです。だから一つの試金石として、郡衙というものも見直して欲しいというつもりで、これを出したのです。

ここでさえ、地元の人はね、いい所なので宅地に売りたいのだけどと云っている。住んでいる人たちは、そういう発想です。おばさん、ここは大事な所だからと話をしても、高くで売れないと云うことだけ。道路が通っていないから、車が通れる道路がないから売れない、と。そういう発想しかない。

小園　少なくとも桑東郷・桑西郷と、二つの郷に分かれる以前でないといかんわな。そうすると1189年の建久図田帳以前でないといかん。それからその期間が問題となる。僕は阿多忠景のことを注目していたけど、忠景はちょっと後だから。ちょうど、平季基の事件がありましたよね。これは小右記ですかね。これはいい発見ですよね。

平田　素晴らしい発見だね。今まで鹿児島の歴史家は気付いていない事件だから。

小園　これらを一つ一つきちんと抑えないとね。

それで、何の時点で移動し、また何の時点で元へ帰って来るのか。それと、その期間は百年なのか、二百年なのか。

平田　そうね、まだ判らない。

小園　二百年もそこに一つの国衙があるとすればというのが私の心情なんだけど。

平田　ただ、帖佐よりも曽於の方が大隅国全体を統括するのには都合がいい場所だよね。だから絶えず曽於に帰って来ようという動きはあったと思う。桑原郡には一時厄介になるというのが。

小園　一時厄介になるのは帖佐までの距離とか、移動する者としてそこに有力な豪族乃至は国衙を切り盛りするような有力な者があればそうですけどどんなものなんですか。税所氏なんかが中心になって、これをやったのでは？

平田　それは、もう判らん。帖佐の平山氏が滅亡してしまっているので。

小園　うん、判らんな。

小川　帖佐城跡に国府があったという話ですが、帖佐城跡というのはどこにあるのですか？

平田　帖佐小学校の裏です。鍋倉宇都という所です。建久図田帳の中に「鍋倉村三丁」と記されています。建久図田帳では鍋倉は加治木郷の中に入っているので、この時代は加治木の勢力がここを支配していたのですね。

小川　鍋倉宇都なんですね。

平田　はい。

小川　そこは神社がありますか？

平田　現在、稲荷神社があります。

藤浪　あぁ、あそこか。

花園　さっき、平安城といわれましたが、上の方ですね。

平田　上の方の山城です。

花園　普通はどうなりますか？

平田　下の館と、上の山城という関係ですから。

花園　あぁ、そういうことで。

小園　その神社の所に何か説明が書いてあったですよね。勧請した人は誰だったとか。

藤浪　お稲荷さんですか？

小園　平山氏ですね。

平田　平山氏？

小園　鹿児島神宮との関わり、国分正八幡との関わりですね。鹿児島神宮の庇護とかいうようなもので移った可能性がないわけではないですよね。何かスポンサーとか、そのようなことがあるのか。

平田　県庁が焼けたりつぶれたりしたら一時的に移らなければならないから、機能するには郡衙がある所だろうね。だから、桑原郡衙の位置をつきとめるのが早道だろうけど。

小園　曽於郡衙の方が近いような気がするけど。

平田　曽於郡衙は？

小園　どこか、郡田のところ。

平田　道場口あたりだろう。それも、曽於郡衙に移れなかった勢力争いもあるでしょうからね。

小園　曽於国府が変ったから桑原国府ということは考えられますよね。変ったという事態ははっきりしているわけですね。この時期、いわゆる和名抄という、その時期が問題になるだろうけど。

平田　その時期は今後の問題としておきましょう

花園　大隅国から大宰府までの距離を考えると。

平田　大隅国からは12日ですね。

花園　1 日か 2日加えると、14日ぐらいになるのかな、と思いますが。その辺から考えて、大口の方を回った場合は、時間的に、距離的に、長くかかるのではないかと思うのですけど。

平田　どっち？人吉の方に抜けた方がいいというのですか？

花園　栗野〜真幸のコースと、国分から大川原へ抜ける小園先生のいうあのコースを行ったら、大川原の方のコースがだいぶ近いのではないかと思うの

です。そっちの方で数えたら、20ぐらいの駅があるわけです。

小園　大口の方を回ったら、やっぱり遠くなるのではないかな。

藤浪　霧島越えがよく云われます。義久公が九州征伐に行かれるときも出ていますよね。義弘公が関ヶ原で敗れて帰って来られるときの、佐土原からこっちへ回って山越えで帰って来られます。

小園　霧島越えと云ったらですね。いわゆる御池の道路を行くのか、あるいは横川を通って越えて行くのか。

藤浪　高原の大きな神社へ参拝されたりしてるのではないですか。

小園　霧島越えと云ったら山を越えるような感じがするけど、そうじゃなくて御池のところを通る。

平田　それらは中世・近世の道としては意味があるでしょうけど。時間がありませんから、今日のところは、これで。

鹿児島地名研究会会員名簿

青柳　俊二
池田　信夫
泉　　敏夫
上野　堯史
江之口汎生
江平　　望
大田　照夫
小川亥三郎
小川　秀直
納　　栄蔵
梶原　　武
片岡　八郎
唐鎌　祐祥
霧島　一浩
郡山　政雄
小園　公雄
小原　親英
木場　武則
佐野　武則
下野　敏見
鈴木　順一
千葉　昭彦
永山　徹弥
西　　昭三
西薗　一俊
能勢　正之
長谷川順一
花園　正志
花田　　潔
浜崎　盛雄
原口　　泉
肥後　芳尚
平田功美子
平田　信芳
二見　剛史
藤浪三千尋
本田　親虎
本田　碩孝
松田　　誠
松浪　由安
三木　　靖
宮原　景彦
村上　良典
山口　静也
山崎　盛隆
吉原　林昭
米原　正晃
脇元　東明

[大隅国関係の年表]　　1993.6.6 作成

699年(文武天皇三年)　三納・稲積二域を修す。(続日本紀)
713年(和銅六年)　大隅国設置　(続日本紀)
　肝属・囎唹・大隅・姶羅の四郡
720年(養老四年)　大隅隼人の叛乱、国守陽侯史麻呂殺害。
　中納言大伴旅人 征隼人将軍となり鎮定
　(続日本紀)
740年(天平十二年)　藤原広嗣の乱
741年(天平十三年)　国分寺建立の詔。
755年(天平勝宝七年)　菱刈郡設立　(続日本紀)
755年 ～ 804年　桑原郡設立 ← 律令残編「管郡四郡」
756年 ～ 820年　大隅国分寺建立。
758年(天平宝字二年)　大隅正八幡宮建立？
769年(神護景雲三年)　和気清麻呂、大隅国へ配流。
　(続日本紀)
764年(天平宝字八年)　大隅・薩摩の境で噴火。鹿島信網村の海に三嶋を生ず　(続日本紀)
778年(宝亀三年)　大忍持神を祀り、官社とす(続日本紀)
788年(延暦七年)　曽於乃峯(霧島火山)噴火(続日本紀)
800年(延暦十九年)　大隅国に班田制実施(類聚国史)
1021年(治安元年)　秩所篤如が正八幡宮・霧島宮司職となる。
1026年(万寿三年)　平季基が島津荘を開発する(旧記雑録)
1029年(長元二年)　平季基等、大隅国の国庁・寺館・官舎・民家ならびに藤原良孝住宅を焼払う。
1132年(天承二年)　往古大路宮坂襲の石躰に八幡(いわ)顕現。
1142年(康治元年)　大隅国分寺石造層塔建立。
1177年(治承元年)　平康頼・藤原成経・俊寛ら鬼界島配流。

(1) 10c. 『倭名抄』(源順 911～983)　「久波波良国府」
　承平年間(931～937)に成立
12c. 『色葉字類抄』(伊呂波字類抄)　橘忠兼著
　1144年(天養元年) 2巻本
　治承年間(1177～80) 3巻本 ……「桑原国府・曽於府」
　鎌倉時代　10巻本
14c. 『拾芥抄』　洞院実熙(1409～57) もしくは洞院公賢(1291～1360)の編著。
　鎌倉時代の中頃に成立 ……「贈於府」
　〈木下良氏 私信〉

(2) 贈於国府 ⟶ 桑原国府　その時期？
　桑原国府 ⟶ 贈於国府　その時期？
　(国分市府中)

(3). 歌枕の出現 ……桑原国府の周辺にない。
1. なげきの森. (10c.) ―― 桑原国府への移転後？
・ねぎごとをさのみ聞きけむ社こそ
　果てはなげきの森となるらめ ……讃岐(昌泰ごろの人) 898～901
・おいたちて枯めと聞きし木の本の
　いかてなげきの杜となるらめ ……清原元輔(908～990)
2. けしきの森 (12c.) ―― 贈於国府復原後
・秋の来る気色の森の下風に
　立ちそうものはあわれなりけり ……待賢門院堀川(生没年不詳)
　待賢門院(1101～1145)
・音に聞く気色の森に来てみれば
　立ちそうものはあわれなりけり ……西行法師(1118～1190)

(4) 建久図田帳(1197)の田数

桑東郷　189丁4反　(万善12丁, 松永7丁, 武安6丁 etc.)
桑西郷　156丁2反60歩　(溝部在河2丁, 小浜村8丁 etc.)
帖佐郡　371丁　(220丁8反?)
蒲生院　119丁
吉田院　18丁2反.
加治木郷　121丁7反　(鍋倉村3丁 etc.)
横川院　39丁5反

(5) 「帖」地名 ——— 『日本地名総覧』(角川)より。

1. 帖 (ちょう) ---- 志布志町帖
帖地 (ちょうち) ---- 喜入町生見
下帖 ---- 吾平町下名
丁場 (ちょうば) ---- 薩摩町求名
帳尻 ---- 祁答院町下手

2. 庁 (ちょう) ---- 鳥取県国府町 (因幡国府)
長 (ちょう) ---- 富山県小矢部市 (町の変形?)

3. 長郷 (ちょうごう) ---- 鳥取県岩美町 (山麓の長い郷?)
長所 (ちょうしょ) ---- 新潟県燕市
町田 (ちょうだ) ---- 兵庫県姫路市
町田 (ちょうだ) ---- 佐賀県唐津市
丁田 (ちょうだ) ---- 愛知県西尾市
丁田 (ちょうだ) ---- 静岡県浜松市
丁の坪 (ちょうのつぼ) ---- 福岡県筑後市
町の坪 (ちょうのつぼ) ---- 兵庫県姫路市. (条里制遺称?)

文化

大隅国府は移動していた

平安時代の一時期、帖佐に

平田信芳

一昨年から大隅国の駅路についての研究が相次いで発表されている。小園公雄「大隅国府と日向国島津駅との古代官道について」(鹿大史学39号)、武久義彦「明治期の地形図にみる大隅国の駅路と蒲生駅家」(奈良女子大学地理学研究報告Ⅳ)などがそれである。

駅路には約三十里間隔で駅家(うまや)が設置されており、大隅国では蒲生と大水(おおみず?)に駅家があった。蒲生駅は薩摩国府との間の駅家であるが、大水駅は日向国への駅路にあるとする説と、肥後国への駅路にあるとする説に分かれる。

航空写真によって蒲生駅跡を蒲生町下久徳蔡中に当て、前郷川右岸に川と並行した駅路の痕跡があるのを発見したのが武久論文である。「長門本平家物語」に記された俊寛らの南島配流の経路に着目して大水駅を大隅国府(国分市)と島津駅(都城市)の中間に求めようとしたのが小園論文である。これらの成果を踏まえて大隅国の国府・駅路の分析を前進させてみたい。

大隅国府には贈於国府と桑原国府という異なった記録がある。「和名抄」(十世紀の辞書)は桑原国府と表現し、「色葉字類抄」(十二世紀の辞書)は桑原国府・曽於府を併記、「拾芥抄」(十四世紀の辞書)は贈於郡に国府があったとする。

和名抄、色葉字類抄、拾芥抄の記録を満足させる解釈は、大隅国府は奈良時代には贈於郡、平安初期ごろに事情があって桑原郡に移転、平安末期に再び贈於郡にもどったとみることである。国分市府中にあった大隅国府は近くに大隅国分寺跡があることから贈於国府と理解してよい。一方、桑原国府は今までなぞのままであった。

ところで「石清水文書」の中に天承二年(一一三二年)の文書がある。大隅正八幡、大隅国府、大宰府からの公文書で「石に八幡の文字が出現した」という内容のものである。八幡の文字が現れた場所に石躰神社(隼人町)が建っているわけだが、その位置の説明に「往古の大路にあたる宮坂の飛の石躰に八幡の御名が顕現した」とある。往古の大路とは昔の駅路を意味する。大隅国府ー宮坂を結ぶ駅路があったことを物語る史料であり、その延長上に大水駅があったことを推定させる。

宮坂を上って溝辺の台地を粟野、大口方面に向かう駅路に沿った桑原郡所属の郷を現在の町村で考えると隼人町、溝辺町、横川町になるが、これらは桑原国府となり得る資格がない。これらの町村に桑原国府があれば、宮坂を通る駅路を廃止する必要がないからである。そうすると桑原国府は蒲生駅と贈於国府を結ぶ駅路近くに求めなければならない。候補地は後世も政治、経済の要衝となった加治木城か帖佐城かにしぼられてくる。加治木では安国寺付近が立地条件として格好の地となるが、ここは九州縦貫道が横切っており、遺跡が存在したとすれば縦貫道の事前調査でチェックされたはずである。その観点から加治木の可能性は薄い。

帖佐は「庁(役所)+地名語尾の佐」、あるいは「庁舎」に由来する地名だったのかと考えながら帖佐城跡へ出かけた。

三方山に囲まれた景観は太宰府都府楼跡付近と似ている。言うなればミニ都府楼。一町半(約百六十㍍)四方の高台の随所に土師器、須恵器、青磁の破片の散布がみられる。別府川を隔てた宮田ケ丘に瓦窯(かわらがま)跡もある。これは大隅国分寺用と考えられてきたが、桑原国府用と考えることも可能となった。船津、十日町などの周辺地名も国庁(国衙)に付随したものとして生きてくる。周辺に神社、寺院跡も多い。

平安時代、のちの帖佐城の地に桑原郡衙があり、そこに大隅国府が移動していた時期があったと考えられる。それが和名抄に記された久波々良国府の正体であった。

(日本考古学協会会員)

平安時代に大隅国府があった帖佐城跡一帯

H.5.5.4 (火) 南日本.

地名研究会報

第４２号
平成６年９月４日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第４２回例会　平成５年９月５日（日）　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・江平　望・納　栄蔵・片岡八郎・小園公雄・能勢正之・花園正志・肥後芳尚
平田信芳・二見剛史・松田　誠・松浪由安・村上良典（計１３名）

Ⅱ．甕藩名勝考読会　P.142～P.146

（話題となった事項および地名）　桜島・沖小島と燃島

桜島

平田　ここに桜島の歌が沢山あります。一番古いものは西行のようです。西行の桜島はこっちの桜島を云ったのかどうかは、定かではありません。近衛前久・細川幽斎などは戦国末期の人でしょうから、15世紀には歌枕として用いられた桜島という呼称はあったとみてよいでしょう。桜島と正式に名付けるのは元禄十一年(1698)。島津の殿様が将軍綱吉にミカンを献上する時に、向嶋ミカンじゃ都合が悪いから、「桜島」と名乗れと命じているのわけです。それ以前にも文人たちの間で用いられていたと理解していいと思います。

146ページの下の方にある桜島噴火の履歴は、わりと詳しく書いてあります。他の本よりも詳しいのじゃないでしょうか。何か問題にしたいものはありませんか。

小園　宝字二年が最も古いということ。もちろんこれ以前にもあったわけだけど。たまたま宝字二年の爆発の記録があったーーー。

平田　そうですね。それ以前のものは、はっきりとは判らない。

小園　それと、神造島。先日、竜ケ水の崖崩れで大惨害があったのですけど。姶良カルデラの構造上いわゆる中心的な火口があったわけですからね。その脇にやっぱりエネルギーの捌け口があるはず。それと平松神社がありますね。その脇の方は土石流が出ていますね。たまには降りてみようと思っているのですけど。

143ページの桜島忠信の話。これは『今昔物語』に出ていないのですね。桜島忠信とは出て来ないのですね。ただ、大隅守で出ているのですが、これははっきり桜島忠信で出ていますね。

平田　桜島忠信の名をとって桜島と付けてというわけですね。

江平　桜島という苗字があるんですね、あっちにはあるのです。こっちの桜島とは関係なく京都には古くからあったのです。近在の下級官人の苗字に。

小園　たまたま一致したのですね。

江平　大隅守説話で桜島忠信があったものだからこれを一番最初に使ったのは、あれは誰かーーー。

平田　巣松詩集。15ページの上の段に出ています。

江平　巣松。大永三年ですね。向島というのは、後世ずーっと使用されていて、行政的に桜島と切り換えたのが元禄十一年。ミカンの方も商業用として桜島ミカンとした。向嶋ミカンを桜島ミカンにとり換えた。桜島ミカンを献上したのは江戸時代の初めで、知恵伊豆と云われた松平信綱の時に、献上しています。元禄時代よりも早くですね。

小園　大隅守がいましめた郡司は調べても判らん

平田　うーん、郡司の名前はね。

小園　しどけなき郡司だから。

平田　だらしがない、ということだね。

小園　だらしがないからですね、何度ももたもたしたものだから、役所に呼んでクビにしようと思った。それが歌をさーっと詠んだことで助かった。歌をみて、やるなと思ったことでしたが。

二見　いろんなのに載っているのですね。

平田　この話を載せているのは多い。

小園　『本朝文粋』を読んでも、まさか桜島を指しているとは思いませんけど。桜島とある、これを読んで、あぁと思ってですね、楽しかったです。

納　それから、この桜島の地名で、『言語学』というのですか『国語』でしたか、琉球大学の外間某という人が面白いことを書いていました。陰陽から見てるのですね。というのは、桜島の場合は鹿児島の東側にある。東というのは、神様がおられるところがある。そして、色は青なんです。青はオウとも読むわけです。桜のオウと青のオウと同じだから、桜島としたんだと書いているのを読んだことがあります。面白いことを書いていましたがね。

平田　そうしたら、あちらこちらに「オウトウ」という島がなければならない。桜島だけでなく、他にも例がなきゃ、その説は成立たない。

納　宮崎県に青島というのがありますね。あれも東の方にあるから「青」なんだ、と。

平田　それはどうだろうか。青島は木の「青さ」がやっぱり優先するんじゃないかな。

二見　青竜という考え方。

平田　青竜白虎の解釈でしょうね。

二見　青島ならば、その解釈も出て来るでしょうが、桜島の場合は歴史的な由来はついて来ますから

沖小島と燃島

納　146ページの上の方に、沖小島が書いてありますね。「オコガシマ」と云っていたのですが、これが正しいのでしょうね。昔は－－－

平田　さぁ、もう、この時代は鹿児島弁があるでしょうから、それを仮名で写したのじゃないでしょうか。

江平　正しい、正しくないというよりも、聞いた人の感覚で、沖小島をいうて「オコジマ」と書いたのでしょうから。

小園　この仮名は、当時のものを使っているでしょうからね。

江平　そこが難しいから。

小園　これは、こちらにある島じゃないでしょう

平田　沖小島でしょう。

小園　149ページにある島。これは、どこの島かなと思って。

平田　いおう島、猪子島。これはあれでしょう。高免のところに沢山、小さな島があるね。燃島とか云うている。あの系統の一連の島じゃないかな。

小園　あすこに沈みつつある島があるでしょう。

平田　そうそう、あれだ。

小園　桜島の成立について、いろんな説が出て来ます。花の系統は、木花咲耶姫とか、桜の花がいっぱい咲いていたからとかいうけど、どこに桜の花があったのかな、と。僕は笑いながら云いますけど。

平田　はい、今日はこれくらいにしましょう。事務的な打ち合わせですが、「続ごしま地名ものがたり」について今からお願いします。（省略）

開拓地の地名

能勢正之

私は「開拓地」を地理的な観点から調査しております。地名は全くずぶの素人ですので、いろいろご指導頂ければ有難いと思います。私が研究しているのは「戦後の開拓地」が中心になります。

開拓地については、桐野利彦先生がかなり詳しく研究しておられるわけですが、今日は戦後の開拓地の地名ということで話をさせて頂きます。

開拓というのは、人間の歴史が始まって以来ずーっと行なわれているわけで、藩政以前・以後・明治・第二次世界大戦以後、と、開拓の対象そのものがかなり違っているわけです。とくに藩政時代は西目から東目の方へ、薩摩半島から大隅半島への移住による贈於郡の開拓が行なわれています。それから、明治以後の開拓地になりますが、時代が下ると段々条件の悪い所が開拓されて来るわけです。明治以後は、甑島・奄美諸島の開拓が主になります。そして桜島の大爆発後の移住・開拓。第二次世界大戦後の開拓は、それこそ従来開拓されていなかった非常に条件の悪い所、そういった所が開拓されています。人間の居住境界地域：農耕境界地域と云いますか、そう云った所が開拓されていくわけです。

次に、開拓地名ということになりますが、藩政以前の場合は、とくに河川の流域が開拓されております。藩政時代になって来ますと、耕地開発というのが非常に拡大して来るわけです。拘地・免税地というのが増えて来ます。この辺のことについては、既に詳しく研究されております。とくに笠野原台地に垂水堀、花岡堀、○○堀という地名が、その例になります。「地名＋堀」ということですね。領主による開拓地が増えています。開(ビラキ) とか新田(シンデン)とかは、よく試験に出ると高校生には教えておりますけれど、鹿児島県の場合は○○堀。そう云った地名は古い開拓地名です。

明治以後の開拓地名になって来ますと、とくに甑島あたりからの開拓移住者が目立ちます。県下一円に出ておりますけれども、とくに種子島、例えば、安城(アンジョウ)、南種子の焼野(ヤキノ) など。それから奄美諸島、喜界あるいは沖永良部、与論、徳之島からの移住者がいます。種子島の白石とか、あるいは十五番、二十番、竹之川。あるいは竹屋敷、長谷あるいは鯨山、神瀬。こう云った所も新しい開拓地です。それから、桜園。これは西之表にありますが出身地桜島の名前の一部を付けたものです。

第二次世界大戦以後の開拓地になりますが、開拓の対象となった所は、先程云いましたように、農耕境界地域と云いますか、従来農耕地になっていなかった所、それから軍用地。こう云った所などが開拓地になっているわけです。とくに、この二つが顕著です。

そして、開拓地はどういう地形の所にあるか、ということで調べていますが、ここでは地名ということですので、それに焦点をしぼります。開拓地の地名を大きく分けるた場合、どういうふうに分けられるか云うと、まず地元から入植した所。これは、その地域の字名を付けております。資料のNO.2を見て頂ければ判ると思いますが、地元出身者による開拓地です。それから、甑島・大島・徳之島・与論島からの移住者。明治以来、いろんな所に移住して開拓地を新しく作っております。次に引揚者。とくに南洋諸島からの引揚者ですね。こう云ったところの人々が開拓地を形成しておりますが、それらの方が本土西部の開拓です。

屋久島の図が、今年調査して一応出来あがってはいたのですが、間に合わずに、ここには出しておりません。この図は種子島の開拓地です。開拓者の出身地と開拓の年、それと地名を図示してあります。

ご覧になれば判ると思いますが、大体、地元からの開拓になります。これは従来の字名が付けられています。出水の方の前田・檜木・青椎・坂元。高尾野町では焼山・野平・諏訪山・連尺野。それから阿久根の白木尾、東町の犬ヶ野、長島の城川内・蔵之元ですね。あるいは大口の折小野、菱刈の新川。鹿児島の平野、加世田の網揚、頴娃の熊ヶ谷、枕崎の小塚・奥ノ平、喜入の吉見山。それから西之表の鹿之峰・高山。中種子に行きますと、三角山・砂中・大石野・阿保・大久保・広ヶ野。南種子に行きますと長谷野・赤石牟田・有尾・摺久保・椿山・野大野。それから上屋久は小瀬田とか永峰ですね、屋久では高平・上之牧。

従来、それこそ山あるいは荒地です。こう云った所が新しく集落地として形成されて、耕地に列せられたということになります。

それから、それこそ様々な観点から地名を付けておりますが、出身地を付けた地名の面白い例として大口に「日東(ニットウ)」という所があります。これも図示してありますが、大口の五米木(ゴメキ) の南の方に日東という所があります。ここは日当山と東郷出身の方々が中心となって開拓に従事された所です。日当山出身が５名、東郷出身者が15名、その開拓に従事しているわけです。したがって「日東」という名が付けられたということです。

それから、「原尾」。これもまた、面白いのですけど、もともと私が開拓に興味を持ち出したのは、この原尾からの生徒がおりまして、もう随分前になりますが、パラオ諸島から引揚者が中心になってという話を聞いたもんですから、それでいろいろ調べまして興味をもち出したわけなんです。中種子と南種子の境目のところに「長谷」という所があります。この長谷というのは、鹿児島県では最大クラスの開拓地です。南洋諸島のパラオとか、マリアナ諸島。こう云った所から入植者が入っています。パラオから原尾と付けたということです。種子島は海岸段丘が非常に発達しておりまして、開拓地としては非常に広く、また古くから移住者がいて、随所に開拓地が出来ております。

それから大久(オオヒサ)。これは川上保武という人が中心になっています。この方は、満州からの引揚者ですが、長野県の方で、満州開拓団に入っておられて、奥さんの故郷の近くに開拓者として入られたということです。開拓地の名前を付けなければということで考えた末、北の方にある「大丸」と、南の方にある「久木野」という地名をとって、「大久」と命名したとのことです。

それから、鹿島。これはかつての出水海軍航空隊の跡で、コンクリートの滑走路をはがして開拓した所です。当時の苦労というのをいろいろ話して頂きました。主に海軍の方たち、それから鹿屋航空隊の軍属の方、こう云った人々が主体となっています。この他に台湾・満州からの引揚者、あるいは沖縄出身ですね。こういう方々が開拓を始められたわけですが、軍人ですので、地名を付けるに当っては「鹿島立ち」ということで、「鹿島」という名前を付けたとのことです。

その他に、まぁ豊かな土地というのをねらって、「豊原」とか「富ヶ岡」とか。豊原というのはあっちこっちにあります。開拓地として名付けられたものです。出水の豊原は、宮之城からの移住者です。大口の富ヶ原は、指宿・川辺・桜島からの移住者・入植者が多く、現在は養蚕が盛んなようです。

「開」とか「新開」、「新拓」とか「開拓」などの地名がよく付けられると生徒には教えておりますが、５万分１あるいは２万５千分１の地形図に出て来る地名でもあります。

それから、三日月。これは大口にあります。此処も山野とか溝辺からの入植者で、もともとは木炭製造に従事しておられた人々のようです。その村近に

大きな石があり、それに三日月形の傷があるので、周囲の人々が三日月と名付けたとのことでした。

それから五色(ゴシキ) ですが、これも又、開拓者の発想というのは様々な観点からの発想があります。菱刈の五色、これは川内川流域と伊集院からの入植者が主体なんですが、他にない新しい地名を付けよう、五色に輝くようにということで「五色」と付けたそうです。

それから菱刈の南の方に、一茶(イッサ) という所があります。これも非常に面白い地名です。此処の場合は古くから「イッサガオカ」と呼ばれておった。しかし終戦後の軍国主義一掃という風潮からイッサ（戦さ）というのは具合が悪いということで、まぁ語呂合わせで俳人である一茶を当てて名付けられたということです。ここは主に地元出身の方が中心となって開拓に従事した所のようです。ここも養蚕が盛んなようです。

それから、宮之城の東の方に「旭」。その近くに「興南」という所もありますが、５万分１図や２万５千分１図には地名としては出ておりません。旭は宮之城の東にあって、朝日が昇る地域。大島出身の入植者です。朝日というのを付けようとの話になったのを、朝日は他にもあるから「旭」がいいのではないかということで付けたそうです。

それから、宝来(オウライ)。これは中種子町にあります。これも図に出ておりますので、ご覧下されば判ります。中種子の中心が野間です。そのちょっと北の方に宝来という新しい開拓集落があります。これは「宝来殖産」という会社の名前から付けられたということなんです。宝来殖産というのは大阪にありますが、戦前、ここで砂糖黍の栽培をしておったということです。そこの従業員が此処に残られて開拓されたということです。出身を見ますと、大島出身の方が５名、それから近くに平鍋という所、これは古い集落ですが、そこが２名。それから、県外から香川・山口。県内はその他に屋久島・沖永良部。こう云った所からの入植者が開拓しております。全員、サトウキビ栽培で、安定した農業経営を営んでおられるようです。

それと、城下(シロシタ)。これは屋久町の南の方にあります。屋久町の場合は、ほとんどが字名を付けた開拓地。全部で９あります。その中で唯一の字名が付けてない地名ということになります。平家の城といわれる岡があり、その下にあるということで「城下」と付けられたということです。本当に平家の城だったかどうかというのは、いろいろ調べてみたけれども判らなかった、と。ただ、昔からこう云ったということです。

その他、字名から変じて広ヶ段とか駒ヶ段とか、そう云った所があります。５万分１地形図にない地名と云いますか、開拓者が決められた名前としては例えば宮之城に大洞と書いて、これは「オオラ」。「旭」の近くです。ここは地名そのものはありません。また、大口に「日之出」という所があります。日之出というのは大口南部の湯之谷ですかね。ここを開拓者の方々は「日之出」と呼んでおりますが、５万分１地形図では「湯之谷」となっております。

それから、開拓という意味で、新地とか新田とかですね、まぁこう云った地名があります。大隅半島を調べたらまだまだ具体的にいろいろな地名が出て来ると思います。一応、開拓組合員名というのが判っておりまして、実際その現地を調査して、どこからどこと確定して、その中でいろいろ調査しなければなりません。現在薩摩半島と熊毛地区について調査が終了しましたので、ここに出してみました。大隅半島には豊成とか平和とか、いろいろな地名があります。そこがまとまりましたら、面白い結果が出るのではないかと思います。

一応まとめてみますと、戦後の開拓というのは鹿児島県の歴史の上で類を見ない非常に大規模な観点

から行なわれた。非常に地域が広く、しかも入植の人たちは多方面にわたるということです。地名そのものは、地元出身の多い所は、字名が付けられている。地域外の方々が入植された所は、例えば出身地名を付けたり、あるいは付近の地名を足して２で割ったりというような所。それから開拓地ですからいろいろな希望をこめて「鹿島」立ちとか「五色」とか付けている。あるいはその方位にもとづく地名あるいは会社名、これなんかは非常に面白いと思うのです。これは出しませんでしたが、地図では出しておきました。薩摩半島の南部に「高星」という所があります。此処も岡の名前だと思います。以上、簡単でしたが、これで終らせて頂きます。

〔質疑応答〕

平田　どうも有難うございました。能勢先生は今年の４月鹿児島工業高校の教頭として来られた方です。以前から開拓地を調べておられるということで存じあげていました。遠慮なく、質問をお願いします。

片岡　字名を付けた場合、新と旧との混乱はないのですか。

能勢　開拓地というのは、全く新しい所に出来た場合と、それからそこにある程度例えば二・三人がおって、その中に新しく入って来て新しい集落が出来た。かつては二・三おったけど集落は出来ていなかった、と。そういう所はあります。だから、新旧と云った場合に、例えば前田という所がありますが、古い前田という集落と、それこそ全然人が住んでもいなかった所に開拓者が新しく入った、いわゆる他入りの前田ですね、そういう所があります。新旧の区別をつけるのは必要だと思いますけど。例えば、檜木。これもそうだと思いますが、とに角かつてのそう云った旧名と新名。新しく名前を付けた所とか。

片岡　前田では、古い前田と新しい前田というのですか、古いという云い方をするんじゃないですか。

能勢　私がここで問題に出したのは２万５千分１の地形図乃至は５万分１の地形図に出て来る地名ということで、してありますので、古い前田・新しい前田とか、そう云ったのでは区別しておりません。

片岡　住んでいる人には、そういう呼び名が当然出て来るわけですね。

能勢　そうですね。実際は、地元では、はっきりした区別はしていないようです。ただですね、ここに書いてある前田というのは、宇都ヶ迫と開拓者は呼んでいます。もともとは宇都ヶ迫です。地形図を見ると、前田と書いてあるもんですから、こういうふうに書いたわけです。

片岡　檜木の場合、古い檜木と新しい檜木は相当離れているのですか。

能勢　そうですね、ほとんどくっ付いている感じです。

片岡　うしろが拡がったという感じ。

能勢　そうです。今村という形になります。ただ全くの森林地域を開拓したということです。

平田　出水の花田さんから紹介しておいてほしいということで、出水の開拓地名が葉書に書いてありました。檜木と針原も開拓地名ということでした。

能勢　開拓と云っても、純粋に国が指定した開拓地と、従来の農民がいわゆる農耕地を広げる意味でした所とは区別しております。

平田　あぁ、そうですか。

能勢　針原という所は、そういう所です。

平田　ご本人は欠席だけど、こういう開拓地名があるというのが書いてありましたから。

能勢　あぁ、そうですか。それはまた違うのじゃないでしょうか。

平田　それから、開とか新開。そういう地名は県下の小字では沢山ありますね。

能勢　沢山ありますね。

平田　それとね、右側の３．その他の五色。五色

という地名も県下には多いのですよ。

能勢　あぁ、そうですか。

平田　変化形に、こんなのがありますよ。五敷。高江には鄰鴫。これは一体何物だろうと思っているのですけどね。五色に輝くというのとは違って、県下に多くありますよ。意味は判らんけど何か曲者、と思っています。

能勢　この字そのものですか。

平田　そうですよ。これも相当拾いあげてあります。此処１ヵ所だけではない。それから、三日月というのも何ヵ所かあります。三日月形の土地もあるでしょうしね、それから甕(ミカ)と坏(ツキ)。昔、大甕を「ミカ」と云いましたので、そう云った土器類を作った所かな、と思わせる地名。佐賀県の吉野ヶ里に近い三日月は、それではないかと思うのですが。だから三日月形の場所、甕と坏を作った場所、それから三日月を信仰した場所もあるかも知れない。これまた地名としては判らないものの一つです。

小園　三日月大明神というのがある。そんなのもある。

平田　そんな信仰地名があるの？

小園　あすこに○○神社が、そういう神社が、佐多の猿喰にある。鎌倉時代に猿喰という村があり、そこの集落の谷間の水の出る所に、三日月大明神というのがある。

平田　三日月は、信仰の対象になってよさそうだよね。

小園　それから、藩の開拓地を拘地と云います。それと「堀」というのがありますね。この「堀」というのはどういう意味とお考えでしょうか。いわゆる集落の周囲に堀を囲ったのか、あるいは用水路を施したのか。どんなふうに考えればいいか。「堀」が非常に多いもんですから。鎌田堀とか士持堀とか伊集院堀とか、これらは城下士の名前ですね。

能勢　そうですね、笠野原台地は「堀」という地名が多いですね、開拓地に。環濠集落の「堀」という観点で教えていますけど。

小園　桐野先生が紹介された深い井戸がありますね。あの掘抜井戸とは関係ないのでしょうね。

能勢　どうでしょうかね。シラス台地面ですからね。あすこは深井戸を掘らなければ生活出来ない状態ですね。それと関係があるのかも知れませんね。

納　笠野原の地名は、ほとんど「堀」が付いてますが、鹿屋市の郷土誌を見たらさっきおっしゃった環濠地の「堀」ですね。笠野原の場合水が少ないもんだから、そこに水を溜めとった、と。いわゆる環濠集落的な意味の堀だということを聞きました。

小園　そして領域を示す環濠だということですね。

納　鹿屋地方の人はそう云いますよ。

能勢　はぁ。

村上　それとですね、牧の周囲にきれいな「堀」がある。

平田　馬瀬垣・馬瀬堀という類？

村上　あれを「堀」ということを書いた先生がおられたけど。

能勢　橋村先生。

村上　その橋村先生に連れられて見て回ったのですけどね。

能勢　薩藩時代の牧場。その周囲には、境目には堀がありましてね、そう云った堀、土手と云いますかねーーーー。

納　それとですね、さっき種子島の話が出ましたが、種子島の場合に、西之表から真ん中を通って、あすこは倉狩、倉狩という所は確か箇島からの移住者ですね。それから古田に出て、中種子のあれは増田か、えーと浜津脇ですか。

能勢　浜津脇。

納　あすこまで一番から二十番までありますね。

能勢　そう、ありますね。

納　あれは、距離はいくらくらいですか。

能勢　あれでいくらぐらいでしょうかね。考えたことがないのですが。

納　鹿屋に一里山というのが二ヵ所にあるのですよ。一つは笠野原の入口に一里山ですね。それから古江の方に行った所にですね、また、一里山があります。二ヵ所、一里山というのがあるのですが。

能勢　どこからどこまででしたっけ。此処にスケールのついた地図が出ております。1cm。これが2Km。スケールでですね。だから浜津脇というのは、宝来の北西の方ですよね。

納　宝来橋からちょっと下の方に入った所です。

能勢　そうですね、ちょっと南ですね。どこからどこまででしたっけ。

納　えーと、西之表を出て、甲女川という川があるんですよ。

能勢　はぁ。

納　その川を遡って、古田。

能勢　古田ですね。

納　あすこから、増田に出て。

能勢　はい、増田ですね。

納　それから、浜津脇に行って。

能勢　はい、ありますね。ここを縦貫して、それこそ、えー、十五番とか二十番とか、そう云った地名が付いております。ここは、ざーっと見ただけで17〜8Km ぐらいでしょうかね、浜津脇までは。西之表から古田・増田を経て、浜津脇まで至る距離ですね。これは20Kmぐらいかな、概算して。

納　それじゃ、大体 1Kmぐらいで付いている。

能勢　そうですね、はい。

納　そうか。浜津脇の上の方に丸田という集落がありますが、丸田十六番と云いますね。

能勢　丸田。あすこも、やはり甑島からの移住者の方々が開拓して、永住されていますね。

納　普通は、大体、陸からだけのものですね。

能勢　そうですね。

納　もう一つ教えて頂けませんか。もう何年か前南日本新聞で川筋の地図を書いていたのですが、あの欄に宮之城方面だったですかね、川内川の上流を、川のすぐそばをですね、そこを開拓した人を。あぁ、キーアケどん（切明けどん）。

能勢　切明けですかね。

納　キーアケどんというのは、そこを開拓した人をば、何か云うらしいですね。そういう開拓した人の名に因んだ地名というのは、ないのですか。

能勢　開拓者の名前をとった地名というのは、戦後の開拓地に関しては、ない。川内川流域では。それから、鹿児島県下を見てもありません。個人名というのはないですね。

納　鹿屋の笠野原方面では多いけど、そういう個人名というのはないわけですね。

能勢　そうですね。藩政時代は多いですね。城下士、あるいは郷士が中心になってやったわけですから、地名にその名前が出ておりますけど。戦後の場合は、国策、国営事業ですので、ありません。

松田　開拓した所には、そういう人たちの、例えば馬頭観音とか。

能勢　あぁ。

松田　以前の居住地の山神さぁとか、塞之神とか陰陽石とか、何か石あるいは神社。信仰地名というものを新しい開拓地に「ここは俺たっがあいやっでね」と、信仰地名を作ったのは、戦後あるものか。

能勢　えーと、ここで云うのを落しましたが、南方神社。そこに「南方」という開拓地がありますが、これは地名はそのままです。屋久島の小瀬田(コセダ)、あすこは永峰開拓地と云っておりますけども、そこは新しく永峰神社というのを作っております。新しく神社を作ったという所はいくつかあります。とに角、新しい集落を作って、そこに自分たちの神社を作る、というふうにですね。一番大きな神社だと思ったのは、上屋久町の永峰神社です。これは堂々たるものです。上屋久の高平開拓地、これにもあります。

小園　城下というのは栗生のこちら側の山ですね。

能勢　そうです。

小園　あそこは小さな集落です。

能勢　そうです。

小園　あそこの稜の上に平家城があるという。

能勢　そうですね。

小園　この前、登ってみたのですよ。

能勢　あー。

小園　城の跡ではないのじゃないかと思いましたけど。そう云った云い伝えがあるようですね。

能勢　専門の方が来られて調査されたということは云っておられました。

小園　それから、大隅の田代に盤山という集落がありますね。

能勢　これも、そうですね。

小園　これも、開拓の方々が満州の開拓地の名前「盤山」をとった、と。

能勢　そうです。大隅もですね、地名は全部判っているのですけど。私が直接調査していないもんですから、あえて出さなかったのです。

小園　門の地名もありますよね。私は中世を調べているものですから、興味があります。昔の開拓のこととか、あるいは川の近くにあるから「川原園」とか。そういうような形で、その土地に合った地名を付けていますよね。

能勢　そうですね。

平田　一つの開拓の歴史だから、時代的な開拓がはっきりして来るわけだね。

能勢　そうですね。その時代の開拓の違いによって地名の付け方が違って来る。

小園　あと 100年か 500年もすれば、また混乱するでしょうね。のちの学者が混乱する可能性があるかも知れません。

平田　整理しておく必要はある。この地名が付いたのは何時代だとか、「地名＋神社」はどの時代に付けられるとか。

能勢　開拓地の地名というのも、まとめてみますと、面白いと思うのですね。藩政時代はこう云った所にこう云った地名がある、ということを具体的に抑えて行って。

小園　忘れてしまいますからね。

能勢　そうですね。

小園　やはり記録をしとかねばね。しかし、戦後大々的に入植者があっても、やがて分散して何もなくなって行く所がありますよね。

能勢　そうですね。この図を見て頂ければ判ると思いますけど、×印のところはですね、離農された所です。全部×のところも、いっぱいあるわけです。

小園　ほう。

能勢　かつて入植地であった所が荒地なんです。荒地で、山地ですね。ただ、農耕地を、林地として残して名義だけを持っているという方ですね。そこはもう開かないということです。例えば、宮之城の宇都川路。ここはもう全部×印です。そして町営の牧場になっております。それから、宇都川路の右手にある、これは楠八重(クスヒエ)。これも「フケ地」という地名がありますが、ここももうないのですね。川内の柳山・土川、これも全部×印ですから、もうほとんどないわけです。だから、こういう入植はあったけれども、現在はもうないということです。

小園　戦後の日本の経済というのが判るようですよね。一応農業をして飯を食うというのから、工業が発達してその労働者となる－－－。

能勢　そうですね。とに角腕の立つ人とか、見切りをつけた人たちは、どんどん離農しています。離農の時期をみますと昭和25年ですね。25〜26年。それから39年、42〜43年、47〜48年。これがピークです。どんどん離農しています。その代りに残った

土地は開拓者が受け継いで、農地拡大がはかられています。それともう一つは、いわゆる新しい感覚を持った開拓者、例えば二・三男とか、アメリカで新しい酪農を勉強して来た人が入植されるとか、あるいは大学・高校を出て将来大牧場を経営しようという希望を持った人が入植していますね。

平田　新しい形の開拓者。

能勢　新しい型です。だから、入植の主人公も、性格が変って来るわけです。

小園　出水航空隊の跡にしても、何か巨大な農家があるとみえて、生活が少し豊かじゃないかなとの印象を受けたのですけど。それはどんなものですかね。

能勢　開拓者というのは、先程云いました通り、まぁ安定しています。後から入植された方は情熱があまりないというのはちょっと失礼になりますけれども。「山之神拡張」という牧場では40haの牧場を経営しておられましたけど、将来、１億円の収入をめざしてやっているということでした。開拓地入植者の話です。

小園　バクチ的因子が多い所ですね。

能勢　はぁ、多いですね。だから要はどんな見通しを持って農業経営をしておられるか、ということです。だから後継者は意欲的です。かなりいい所もあるようです。やっぱり土地を広く持っており、どんなふうに有効に利用されるかによるのですけど。

平田　いろいろ面白いテーマですね。日本の農村の歴史のくり返しを垣間見せている。新しいようで古い歴史も秘めているテーマですね。

小園　あと一問。桜島の黒神のところにある何の前ですか？

能勢　補之前。それと園山です。

小園　これも×印でしょうか。これは何ですか。入植者の数じゃないようですが。

能勢　えーと、これは入植者です。

小園　定着している人が多いですか？

能勢　そうですね。もう、どんどん出て行っておられますね。

小園　桜島の人は、鹿児島に勤めるとか。

能勢　そうですね。私も大体４年ぐらいかかってやっているもんですから、最初の段階と随分様子が変って来るわけです。だから随分×印が増えたのではなかろうかと思います。

平田　ちょうど時間となりました。今年はさっき云った「続かごしま地名ものがたり」に、当分力を注ぐために12月の巡検は中止します。交通網がずたずたに切れていますから、国分・川内のメンバーは今日はほとんど見えていません。本日はこれで終ります。

第４２回地名研究会例会発表資料

開拓地の地名

―本県における戦後開拓地の地名―

鹿児島県立鹿児島工業高等学校　　能勢正之

１・本県における開拓地の形成について

（１）藩政以前の地域

（２）藩政以後の地域・・抱地、永作地、溝下地（桐野利彦氏による）

・藩による開拓地（島津一門）・・外堀、垂水堀、花岡堀、市太夫堀

・城下士による開拓地・・土持堀、鎌田堀、伊集院堀、矢柄堀

・郷士による開拓地・・大堀、中堀、辰食、大迫、黒板堀

（３）明治以後の開拓地

・シラス台地・・

・山間地域・・

・海岸地域・・

・奄美諸島や甑島からの移住者による開拓地・・

・桜島からの移住者による開拓地・・

（４）第２次大戦後の国営事業としての開拓地

・開拓地の選定について

開拓適地選定基準（農林省、昭２８・１・１８）により実施。５万分の１地形図で開拓可能地域を調査し、県開拓課担当職員・地元農業委員会及び地元関係者立合で実地調査した。更に技術的に調査の必要な地域は、林業関係・土木関係やその他専門技術者による再調査が実施され開拓審議会で決定された。

開拓適地に指定された地域は、自作農創設特別措置法（昭２１・１０・２１、法律第４３号）の定める手続きにより民有地は買収され、国有地は管理換、所属換となり国の自作農創設特別会計開拓財産となった。（国有地のうち旧飛行場、演習地・旧軍用地などは、大蔵省から農林省へ管理換国有林は林野庁から農林省へ所属換となる。）

・開拓地の分布 ・・・No２、本土西部、甑島地区の入植状況

No 1

２・開拓地の地名

（１）字名をつけた地域・・分村の形態

・前田、檜木、青椎、坂元（出水）・焼山、野平、諏訪山、連尺野（高尾野

・白木尾（阿久根）・犬鹿野（東町）・城川内、蔵之元（長島）・折小野（大口）・新川（菱刈）・平野（鹿児島市）・網揚（加世田）・熊ケ谷（頴い）・小塚、奥ノ平（枕崎）・吉見（喜入）・鹿之峰、高山（西之表）

・三角山、砂中、深久保、大石野、阿保、大久保、広ケ野（中種子）・長谷野、赤石牟田、有尾、摺久保、椿山、野大野、（南種子）・小瀬田、永峰白川（上屋久）・永久保、松峰、平野、高平、上之牧（屋久）

（２）出身地をつけた地名

・日東（大口）・・日当山、東郷出身者が中心となった開拓地

・原尾（中種子）・パラオ諸島からの引き揚げ者が中心となった開拓地

・大久（野田）・・付近の大丸と久木野からの合成地名。川上保武氏命名

（３）その他

・鹿島（出水）・・開拓を始めるにあたり「鹿島立ち」から命名。出水航空跡地に入植。白水組合（海軍復員が主体）、敬農組合（鹿屋の農工隊等の軍属が主体）、出水組合（台湾、満州からの引揚者が主体）、沖津組合（沖縄出身者が主体）の４組合を結成して開拓に従事した。

・豊原（出水）、富ケ丘（大口）・・豊な開拓地

・新生（大口）、新拓（菱刈）、開拓（出水）・・新しく開いた地域

・三日月（大口）・・付近の峠にある大石に三日月型の傷があり古くから三日月と呼ばれていた。古くからの呼び名をつけた。

・五色（菱刈）・・他にない新しい地名とゆうことで、五色に輝くから五色とつけた。

・一茶（菱刈）・・古くから「戦ケ丘」と呼ばれていたが、終戦後の軍国主義一掃の風潮から語呂をあわせ、また、俳人である一茶の名前から命名

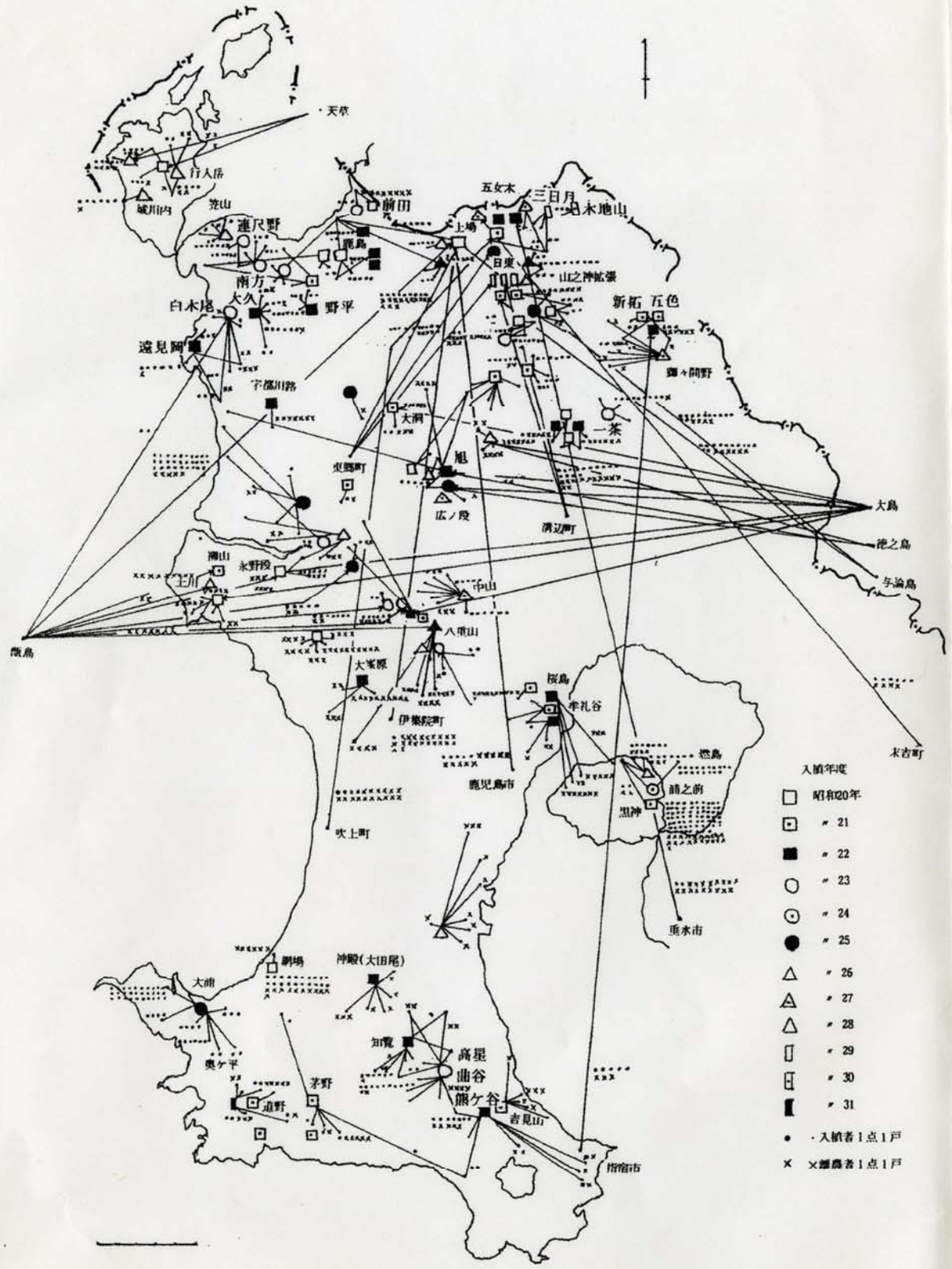
・旭（宮之城）・・宮之城の東にあり「朝日の昇る地域」とゆうことで最初「朝日」と発案したが「旭」に決定した。

・宝来（中種子）・・

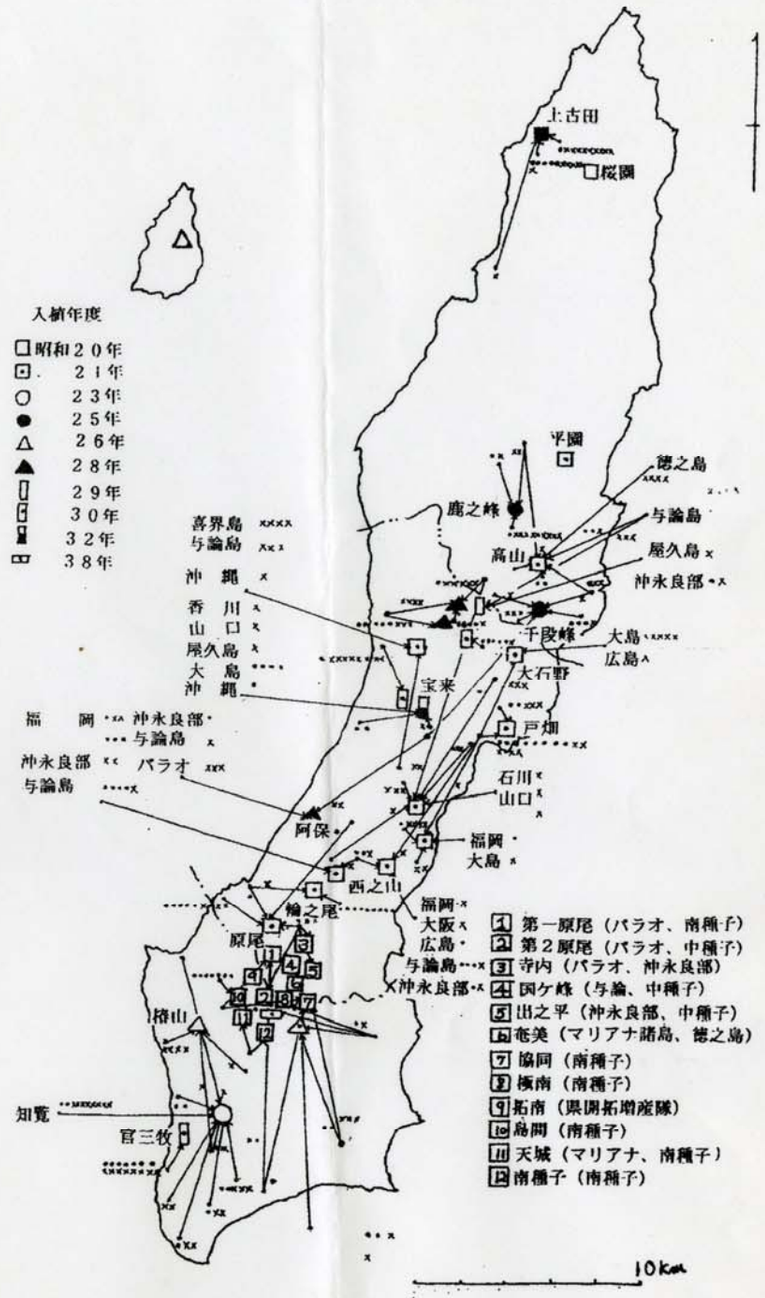
・城下（屋久）・・古くから付近に平家の城と呼ばれる丘があり、その下にある地域ということで命名。

・広ケ段（宮之城）、駒ケ段、大平（藤津）、

鹿児島県本土西部における戦後開拓地の入植。離農状況（能勢正之原図）



熊毛地区における戦後開拓地の入植状況（能勢正之原図）



鹿児島地名研究会例会

例会	年月日	麓藩名勝考読会	話題となった地名	問題提起（発表者）	掲さい会報号数
回 1	昭 58.6.12.		八重他	平田　峠の語源	号 発行年月日 1（58年9月1日）
2	〃 9.1.	P.1～P.8	薩摩の語源	本田　耳取りという地名	2（58.12.4）
3	〃 12.14		鹿児島の語源	桐野　シラス地形と地名	3（59.3.25）
4	59.3.25	P.8～P.12	菜摘の滝他	肥後　山の地名について	4（59.6.3）
5	〃 6.3	P.12～P.14	屯田他	永山　鹿児島の姓と地名	5（59.9.2）
6	〃 9.2	P.14～P.17	鶴丸城他	江口　川内市楠元町の地名	6（59.12.2）
7	〃 12.2	P.18～P.20	多賀山他	小川　国科という地名	7（60.3.17）
8	60.3.17	P.22～P.26	境河他	平田　市後板	8（60.6.20）
9	〃 6.20	P.27～P.31	智賀尾他	佐野　霧島山簗の地名	9（60.9.1）
10	〃 9.1	P.31～P.34	隈の城他	唐鎌　百引郷平房村の門地名	10（60.12.8）
11	〃 12.8	薩摩国分寺跡の現地検討会			
	〃 12.1.		〔南九州の地域文化を考える会〕	平田　波見という地名	11（61.3.2）
12	61.3.2	P.35～P.41	可愛山陵他	中村　熊襲という地名について	12（61.6.1）
13	〃 6.1	P.41～P.46	川内	山崎　枕崎の地名	13（61.9.7）
14	〃 9.7	P.47～P.49	加紫久利他	松田　姶良地名のあれこれ	14（61.11.3.）
15	〃 11.3	姶良町上名の現地巡見			15（62.3.1）
16	62.3.1	P.49～P.53	僧都他	日頃疑問の地名について	16（62.6.7）
17	〃 6.7		祭礼田	江口　難解な地名	17（62.9.6）
18	〃 9.6	P.54～P.57	クルス他	肥後　植物に因んだ地名	18（63.2.28）
19,20	63.1.5	国分市の巡検			19.20（63.6.5）
21	〃 6.5	P.60～P.65	唐船他	江口　徳光と現王	21（63.9.4）
22	〃 9.4	P.65～P.73	九玉他	松田　神社と地名	22（63.11.23）
23	〃 11.23	郡山町巡検			23（平1.3.5）

例会	年月日	麓藩名勝考読会	話題となった地名	問題提起（発表者）	掲さい会報号数
回 24	平 1.3.5	P.73～P.78	配流の島他	唐鎌　麓屋の中在地名	号 発行年月日 24（1.6.4）
25	1.6.3	P.79～P.83	頴娃郡他	浜崎　地名頴娃について	25（1.9.3）
26	1.9.3	P.90～P.93	石垣他	小川　指宿地方における小路	26（1.12.10）
27	1.12.10	加治木町の巡見			27（2.3.11）
28	2.3.11	P.95～P.97	甑島・平礼石他	平田　柊原という地名	28（2.6.3）
29	2.6.3	P.98～P.100	大隅国他	会員　日頃疑問の地名	29（2.9.2）
30	2.9.2	P.100～P.104	御鉢他	郡山　塩の話	30（3.3.3）
31	2.12.9	P.104～P.106	高千穂他	平田　谷山と山川	31（3.6.2）
	3.1.13	入来町巡見			
32	3.3.3	P.107～P.111	路作他	佐野　喜界島の地形と地名	32（3.9.8）
33	3.6.2	P.112～P.118	牡鹿野他	花田　天道信仰関係の地名	33（3.12.1）
34	3.9.8.	P.113～P.116	姫城浦他	肥後　竹に因んだ地名	34（4.3.1）
	3.11.23	大隅国歌枕巡見			号外（　）
35	3.12.1	P.117～P.121	七隈他	小園　大隅国と日向国の駅路	35（4.9.6）
36	4.3.1	P.121～P.124	曽於の石城	江口　可愛山陵の川内五説について 青柳　櫟野駅について	36（4.12.13）
37	4.6.7			大隅国・薩摩国の駅路と伝路	37（5.3.7）
38	4.9.6	P.125～P.129	子亥神他	平田　白石考	38（5.9.5）
	4.11.23	隼人町宮城簗～鳩脇巡見			号外（　）
39	4.12.3	P.129～P.134	奈気木の森他	藤浪　方後郷について	39（5.12.5）
40	5.3.7	P.134～P.138	踊他	小川　提（さげ）という地名について	40（5.12.5）
41	5.6.5	P.138～P.142	録音失敗	平田　曽於国府と桑原国府	41（6.3.6）
42	5.9.	P.142～P.146	桜島	能勢　開拓地の地名	42（　）
43	5.12.5	P.149～P.149	霧島山頂の所属	花園　「曽於郡」という地名について	43（　）

平成6年度 現地巡検のご案内

鹿児島地名研究会

大隅国駅路散策（蒲生駅～桑原国府）

(1) 集合時間　平成6年11月13日(日) 10時

JR帖佐駅発 9時8分 もしくは 9時43分のバスがあります。
蒲生までの所要時間は 20分です。

(2) 集合場所　蒲生八幡神社境内

(3) 行程（徒歩）

蒲生八幡 10:00 ―― 早馬祠 ―― 武義彦説 蒲生駅跡（上久徳禁中） 10:40 ――
―― 船津駅路遺構 ―― 船津公園（休憩） 11:20 ―― 船津田之神
―― 宮田岡 古代瓦窯跡 12:00 ―― 元立院窯跡 ―― 桑原国府跡（帖佐城跡） 12:30
現地解散

(4) 弁当・水筒などは各自持参。

(5) 参加希望者は、葉書もしくは電話で事務局（平田）に連絡して下さい。

第47回例会案内

(1) 日時　平成6年12月4日(日) 10時～12時

(2) 場所　教職員互助組合会館和室

(3) 例会内容

1. 薩藩名勝考読会　P.163～P.166
2. 問題提起

肥後芳尚氏「動物に由来する地名」

地名研究会報

第４３号
平成６年１２月４日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第４３回例会　　平成５年１２月５日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・江之口汎生・大田照夫・納　栄蔵・片岡八郎・西　昭三・能勢正之・花園正志・浜崎盛雄・平田功美子・平田信芳・藤浪三千尋・二見剛史・松浪由安・米原正晃　（計１５名）

Ⅱ．甕藩名勝考読会　　P.147 ～ P.149

（問題となった事項および地名）　安永年間の噴火・霧島山頂の所属・燃島・真珠湾攻撃の訓練・向免

安永年間の噴火

平田　安永の噴火について、これだけ詳しく書いてあるのは他にないでしょう。これが一番詳しいと思います。鹿児島オハラ節の“花は霧島タバコは国分、燃えてあがるはオハラハー桜島”の中にある“燃える”というのは、安永の噴火をさします。それ以前の噴火では“桜島”とは呼んでいないわけですし大正３年の噴火を“燃える”とは言わない。オハラ節は、これ以後に出来たわけですね。

浜崎　148 ページ の上から 6行目あたりに、魚やスッボンがーーー

平田　死んであがって来たということ。

浜崎　浮かびあがった、と。それで、開聞岳が噴火した貞観年間でしたか、ここのところは開聞岳の状況と似ておるのです。魚やスッボンが浮かんで来る。人々がそれを食べると病気になったり死んだりした、と。ところが、その中に、兎とか猪とかは全然出て来ない。ここにも出て来ない。虫けらが出て来ていますね。何か意味があるのか。

平田　動物だったら、さっさと移動して、逃げるでしょうね。

浜崎　逃げるから。

平田　死なないでしょうね。

浜崎　被害に遭わなかった。

平田　そういうことじゃないでしょうか。

浜崎　なるほど

平田　魚の場合は、水圧でやられるでしょうから

浜崎　はぁー。

江之口　場所が陸か海かということでしょう。

浜崎　開聞岳の場合は海から噴出した、と。桜島の場合は山の方でしょうから。そうするとーーー

平田　この場合は海底爆発でしょう。

浜崎　そうすると、生き物はさっさと逃げたと云うわけですね。

平田　それは、そうでしょうね。

浜崎　肉食などはしなかったはずだが、そういう肉食の生活環境は考えられないかということが一つもう一つ、開聞岳の場合はすぐ神様のお告げを聞いておるのですね。ここでは神様のことが出て来ないようですが、その辺は何か時代が違うのですか。

平田　桜島の場合は恐らく桜島の権現様にお願いをしているはずですね。

江之口　それと規模も違うのじゃないでしょうかね。開聞岳の場合は一晩に一尺ぐらい火山灰が積もるような、直接的な被害が出ていますが、こっちの場合は海の方ですから。

平田　桜島にもいわゆる山腹噴火もあったのじゃないかな。何年か前に伊豆の大島が噴火して大地が割れた状況がテレビでありましたが、それと似た状

況だったのでしょうね。大正３年の噴火もわれわれは直接は見ていないけど、あれも今から考えると、伊豆大島のような山腹噴火で、山が割れてあっちからこっちから噴き出していたのでしょうね。

霧島山頂の所属

二見　147ページの上の段ですけど、霧島は日向国と考えてよい？

平田　日向国です。現在でも、山頂で鹿児島県に入るのは少ないようです。高千穂も日向、すなわち宮崎県になります。２万５千分１図でも見られたら判ります。鹿児島県に入っているのはどこだろう。韓国岳の縁がやっと鹿児島県ですね。

二見　霧島というインターチェンジがあるだけのことはありますね。

藤浪　もともとは日向。大昔は日向国だからな。

小園　霧島神も、みな、日向国ですよね。

平田（功）　高千穂は山頂で二県に分かれているのではないですか。

平田　高千穂は宮崎県に入ってますよ。

平田（功）　昔のことでございますが、私たちが高千穂に云った時には、山番をやっている人たちがいたのですが、あの人たちは宮崎県の方でした。

平田　２万５千分１図の高千穂山頂は確か宮崎県ですよ。ほとんど鹿児島県にはないです。

納　高千穂のこっち側の下の馬の背、御鉢。

平田　はい、あすこが境界です。

納　馬の背のところが境界ですかね。

平田　だと、思いますよ。しかし、鹿児島の方が明治時代は偉かったですから、高千穂は鹿児島が宣伝しているわけです。

燃島と真珠湾攻撃の訓練

花園　149ページに島の図が出ています。現在向島、燃島とも云いますが。

平田　燃島でしょう。

花園　燃島ですか。あれはどれになるのですか。

平田　一番大きな島ではないですか、安永の島。

花園　これになるのですか。

平田　だと思いますよ。あとは沈んでしまったのじゃないですか。あすこは現在いくつ残っているのですかね。

藤浪　今残っているのは一つじゃらせんかな。こっちから見えるのは。

花園　国分の方から見えるのは？

平田　二つぐらい見えやせんかな。

花園　二つか三つ見えますよ。一つの島はちょうど軍艦のように見えるのです。戦争中は軍艦に見たてて－－－。

平田　雷撃攻撃の練習をしたのですか。あれは、鹿児島の沖の神瀬の燈台のところでやったのでは？

藤浪　軍艦島でやったと云いますね。

平田　あっちでやったの。いろいろありますね。

片岡　そうじゃないですよ。

平田　はぁ？

片岡　鴨池の空港から飛び立ちまして、あすこに海軍の航空隊がありましたから。桜島の上に急上昇するのですよ。そして、桜島の上にあがったらエンジンを止めるのです。そして、止めたら急降下するのです。軍艦島に。

平田　あぁ、向うの方に。

片岡　オアフ島にそっくりなんです。地形的に見たときに。真珠湾攻撃の練習を、約半年以上やっています。たまたまある朝、そのまま、がっちゃんとやった。

平田　落ちたのですか。

片岡　新聞には、それは一行も出なかった。

藤浪　あぁ。

片岡　オアフ島に見立てての演習だったのです。

平田　じゃー、それは。私が聞いたのは、志布志湾の空母から飛び立って、桜島の上空から急降下して城山すれすれにあがる練習をやったと聞いているのですが。

片岡　逆にですね。

平田　いろんなところからやったのですね。リメンバー＝バールハーバは、三日後ですが。

松浪　上の方から錐あもみで降りて来てですね。

平田　錐もみですか。いろんな練習をやったのですね。

松浪　はい、真昼でもやっていましたよ。もう、毎日のようにやっていたのを憶えていますがね。

平田　あぁ。

片岡　その音がうるさくてうるさくて、そして、下手なことを云うと憲兵隊に知れるとつかまるということで、「朝から製材所がやかましこっなー」と、お互いに云っていましたがね。（笑い）。製材所という名前で話をしていました。

平田　へぇー。

片岡　海軍がと云うとやられるものですから。朝からうるさくてうるさくて、とてももの凄い音でした。

納　私なんかは喜びよったですよ。学校におれば学校の上をあがって行くでしょう。そうすれば授業が中断するわけです。（笑い）

平田　学校はどこですか。

納　商業です。

平田　あぁ、鹿商。なるほど。あすこをあがって来て、城山の上に抜けるわけですね。

納　喜びよったですよ。

平田　えぇ、授業にならなかったでしょうから。ちょうど52年になりますね。

向免（高免）

浜崎　この島の地名は、いつ頃からこんなふうに変ったのですか。安永島の中に燃島があったとか。向免の字は現在と違うようですけど。

平田　向免は高免でしょうけど。

浜崎　この辺の地名の変化というのは、何か。

平田　さぁ。この地名は白尾国柱がそのように理解していたということでしょうね。蛭子島とか猪子島は案外地名として残っているかも知れません。安永島はその後土地の人たちが燃島と呼ぶようになって、安永島と云わなくなったのじゃないですかね。そして、５万分１図を作るときに燃島と一般の人が呼んでいたのでそれを採用したのじゃないでしょうか。そこらあたりは想像でしか云えませんけど。

二見　向免島というのが他にあったのですかね。

平田　向免というのは、今は高免と書く。

花園　文字を変えています。

浜崎　文字が大分違うものだから。

平田　文字はいろんな書き方をするでしょう。書く人たちが次から次へと好い字を作り出して行きますから。

浜崎　はぁー。

二見　桜島自体はどっちなんですか。今、鹿児島市に入っていれは、薩摩国と云ってよいのか。

平田　あれは、大隅国ですよ。

二見　大隅国という意識があるものですかね。

平田　桜島に？もうないでしょう。鹿児島に付ききりですから。

浜崎　これ（蛭子）は、ヒルコか？エビスかも知れませんね。

平田　蛭子（エビス）でしょうね。

浜崎　蛭子（エビス）。

平田　蛭子を「笑子」というふうに国柱が書いたのでしょう。こんな書き方もあるのでしょうね。

藤浪　ありますよ、こんな使い方が。

浜崎　これは「蛭」を書いていますが、いろいろありますね。

江之口　いろいろありますね。

平田　他にありませんか。なければ、花園先生にたっぷり話してもらいましょう。ここで、しばらく休憩しましょう。

曽於郡という地名について

花園正志

曽於郡の地名についてお話し申しあげたいと思います。最初におことわりしておきますが、一週間程前から体調を崩しまして、血圧も 200ちょっとあがってふらふらした状態が続きまして、原稿の方も推敲しないままでワープロを打ちましたので間違いも多いのじゃないかと思います。説明する中で訂正したいと思います。

まず最初、表紙のところ。真ん中の方に地図を描いてあります。曽県というのが真ん中にあります。ちょうど国分市あたりになる所です。いろいろ考えてみたところ、ここに曽県があったのではなく志布志湾の方ではなかろうか、と考えるのですが、これはあとで皆様方から教えて頂きたいと思います。

1ページの方に入ります。質問形式１．「贈於郡の曽於郡」を、どのように読んだらいいだろうかということです。①薩・隅・日惣高並郡郷村調、鹿児島県史料集24、隅州編の76ページ に出ております。その最初に出て来る「贈於郡」を原口虎雄先生が受持っておられますが、「そのこおり」と書いていらっしゃいます。それからその下「一、曽於郡」のところを「そのくい」と書いておられるわけです。このように贈於郡という文字が、ちょっと画数の違いがありますが、「そのこおり」と「そのくい」という書き方になっております。

②薩隅日地理纂考には「贈於郡（そのくい）」と出ております。

「此ノ郡名ハ日本書紀ニ襲高千穂峯トアル襲ヨリ出タリ。景行天皇紀ニ悉平襲国トアル襲国ノ遺称ニテ、倭名鈔ニ大隅国噌唹曽於トアル是也。贈於トアルハ紀国ヲ紀伊、頴ヲ頴娃ト書ルナドト同ジ。東北日向諸県郡ニ界ヒ、南大隅郡ニ連リ、西北桑原郡ニ接ス。郡内八ヶ郷ヲ置ク。襲山、清水、国府、敷根、恒吉、市成、福山、財部」

その下のところは襲山郷（そのやまごう）とふり仮名が付いております。村落九は、田口村・大窪村・川北村、これだけは現在の霧島町になります。松永村・朝日村・佳例川村・東郷村・西光寺村、これらは現在の隼人町になるところです。

③建久図田帳。最初の☆印、曽野郡。そのぐん、そのこおり、そのくい、といろいろな呼び方があるわけですが、これをどのように読んだらよいのか。そのぐん、そのこおり、あるいは、そのくい。

2ページのところが、３．曽於郡の分割となっておりますが、その前の２．を落としております。２．は贈於郡の設置ということです。熊襲の話と、720 年の隼人の反乱のことが脱落しております。また反乱という使い方はどうかとも思いますが、その二つについて地名との関係を書いておったのですが、そこの所が1ページ分、どこにやったのか、コピーを頼む時には入っていなかったらしいのです。そういうことで、ここだけは脱落したままです。

二見　２．の題目は何ですか。

花園　２．は贈於郡の設置。713 年には日向国を割いて肝属・大隅・姶羅・噌唹の四郡からなる大隅国を設置しています。順番は、北の方から云うべきじゃないかと思うのですが、四つの郡が置かれています。そして、噌唹郡から菱刈郡というのが分かれていきます。それから桑原郡というのが、その後に出て来ます。755 年から804 年までの間になりますまた大隅国府は、贈於国府あるいは桑原国府ということでその位置関係がいろいろと問題にされております。国府に位置につきましては、平田先生からこの会でお話があったのですが、その桑原をどのように考えるか、桑原国府の位置などは、今日は一応省きたいと思います。

錦江湾の奥に、国分平野があります。（略図を板書）。この真ん中を流れている川が新川になります以前は下流の方を広瀬川と呼んでおります。この広瀬川を境にして、西側を桑原郡、そして東側を噌唹郡というような大体の位置付けがされております。これについても、その後に出て来る文献などでは、どうもこの川のところだけが境界であったのかどうか、いろいろ問題が出ているようです。しかし一応桑原というのは川によって分けられております。広瀬川の上流は、右の方が手籠川(てごめ)、左側の川は松永川と金山川とが合流して合わせて霧島川と呼んでおります。この手籠川と霧島川の間にあるところここが大隅国府の跡ということになります。最初の国府。

この近くの向花小学校の運動場を拡張するときに三累環頭大刀というのが出ているのです。柄のところが三つの輪になっているものです。現在、国分市歴史資料館に展示してあります。これが１本とその他に長いのが７本。国府跡の近くから出ておりますこれと一緒に出て来たのは、平瓶（へいへい）と呼ばれるものです。鉄剣の方は国分市の文化財に指定されているのですが、一緒に出てきた平瓶の方は指定になっていません。平瓶は県内の考古学専門の方々は５～６世紀ぐらいのもので、朝鮮で作られたものとみておられます。私は昨年、伽耶文化展を見に行った時に、やはりそうだということが判りました。唐津市の近くに浜玉町という所があります。虹の松原の所です。そこからも出ているということを聞いたものですから行ってみましたら、東京博物館の方にやってあって現物はありませんでした。こういうことを調べておった時に、福山町の美術館にもこれが一つあることが判りました。どこから来たのかと院長先生に聞いてみたところが宮崎県だということでした。宮崎のどこだろうかと聞きましたら、その時は教えて頂けませんでしたが、今年の初め、また行った時に話をしましたら、西都原の近くに持田古墳というのがありますが、そこから出たのだそうです。それで私が確認したのは九州管内では福山の美術館と国分の二つです。５～６世紀のもので、伝世した後埋められたということになるわけです。この平瓶という須恵器ですが、平田先生が城山山頂遺跡発掘調査報告書に書いておられます。これを調べておりましたら、こういうことが判りました。国府から出たのは把手が付いております。この把手から何か時代的なことが判らないだろうかと思って調べました。そうすると、律令制が施された頃から規格品として作られているのだそうです。把手がついているのは８世紀のものと云えるというわけです。その後、川内でも、あれは国府跡ですか？

平田　国分寺跡でしょうね。

花園　国分寺跡ですか。同じのが出ております。そういうことで、三累環頭大刀の時期がこれと同じ頃に埋められたことになります。同じレベルに刀が並べられていたということです。そういうことで、８世紀の初めというと、先程云いました大隅国の設置が 713年ですから、ちょうどその頃にあてはまるわけです。 720年に陽侯史麻呂が殺され、大伴旅人が国分の方に征伐にやって来ます。この三累環頭大刀と平瓶は、この二つのどちらかと関係があるのではないかと推定しているわけですが、如何なものでしょうか。

もう一つ、平瓶と一緒に高さ30cmぐらいのものですが、壺が出ております。これも須恵器と書いてあります。寺師見国先生が発掘調査にタッチされており、その発掘調査報告書を見ると須恵器となっております。これは蔵骨器ではないかと思うのですが現在のところ行方不明です。

そう云ったようなことで、国府跡の近くから出ておりますから、大隅国府の裏付けにもなるのじゃないかと考えているところです。これは問題から外れたことでしたけど、あとで教えて下さい。

３．曽於郡の分割に入ります。読んで参ります。

①菱刈郡と桑原郡の分割

隼人征討に成功した朝廷は当然のことながら大隅国の支配を強めていった。贈於郡の分割も進められている。続日本紀に「天平勝宝７年(755年) 大隅国菱刈村の浮浪九百三十余人郡家を建てんことを請うて許さる」とある。

さらに、桑原郡も分置されているが、はっきりした年代は分からない。天平勝宝７年(755年) の菱刈郡の設置以後から延暦23年(804年) の間と考えられる。

〈先程申しあげましたが、右の地図にそれを書き入れておきました。〉

日本後紀の延暦23年に記事の中に桑原郡蒲生駅という地名が出てきていることから、この頃はすでに桑原郡が設置されていることになる。

桑原郡内の郷名は和名抄によると、大原（吉田・蒲生）大分（姶良？）豊国（加治木？）答西（溝辺？）稲積（　？　）広西（国分市広瀬）桑善（？）仲川（牧園）の八郷になっている。なお、郷名のルビと地域の比定は『国分物語』による。

〈平田信芳先生の国分物語を引用しました。この中で稲積郷がどこかということが問題にされます。従来よく牧園町に比定されておりますが、牧園町には仲川もあり、二つの郷が牧園町にあるはずはないということで、稲積郷は他のところではないかと考えられるわけです。 779年、和気清麻呂が流された所は大隅国だけではっきりしないのですが、稲積老に世話になった話から牧園の古名が稲積とみなされて牧園たろうと結び付けられております。しかし、考えてみますと、その当時、和気清麻呂が大隅国まで流されたとしたら、ただ一人、ぽつんとやって来たのでなくて、当時の配流は家族も一緒だったというようなことも書いてあります。ましてや、名前まで和気清麻呂から浄麻呂に変えられた人ですから国にとっては重要な犯罪者という考え方も出来るわけです。そう考えますと、稲積郷にもし清麻呂が流されて来たとすると、それは国府に近い所じゃないか。とすれば、現在の隼人町の日当山あたりが稲積里と考えられないものか、と思っているわけです。これも確定的なものは何もありません。推測に過ぎませんが、そのように思います。〉

②贈於郡の郷名

和名抄に葛例（福山）志摩（桜島）阿気（？）方後（隼人）人野（垂水市牛根）の五郷になっている。郷名のルビと地域の比定は桑原郡の比定と同じく『国分物語』による。

〈これで私が考えたものは、贈於郡の中でも非常に広い範囲ですので、その中で襲山・曽於郡にあたるものは、どこか。国分市の北部にあたるところが、霧島方面までひっくるめてですが、それに当る所がこれらの中にあるのではないか、というふうに考えたわけです。方後郷については以前藤浪さんが発表されましたし、平田先生からもこれについて話がありました。方後郷が曽於郡(そおぐん)を含めた、今の霧島町あたりを含めたものであるのか、どうか。方後は「潟尻」というような考え方になっておりますので、今ここに出て来ているどれかが曽於郡や霧島町あたりを指すものはないのか、ちょっと追求してみたいようなところであります。次を読みますと〉

贈於郡と桑原郡の郡界ははっきりしない。国分平野の西部は桑原郡に、東部は贈於郡に属していたとばくぜんとしかいえない。平安末期から脚光を浴びる「曽野郡」はどこにひそんでいるのだろうか。

〈これも読み方を「そのこおり」あるいは「そのぐん」、幾通りもあると思うのですが、「そのくい」と読むのが一番妥当ではないかと思うのです。〉

４．曽野郡の出現

①大隅国の新しい郡・院・郷誕生

源頼朝が鎌倉幕府を開いた６年後の建久８年（1197）に書かれた土地台帳に建久図田帳というのがある。この中に大隅・薩摩の図田帳の写しが残っている。この図田帳や建久９年の在庁注進御家人交名・弘安の役前の建治２年(1276)の石築地役配符・清水の古刹台明寺の文書などを参考にして大隅国郡院郷の地名を地図化したのが下の地図である。この地図は中世の大隅国郡院郷図として定着している。地名が記入されている牧園町郷土誌149ページの地図を一部訂正して借用させていただいた。

この地図をみると、律令時代の郡名は狭い地域に残ったり、また消えてしまっている。一方、郡にかわり出てきたのが、院・郷・庄のつく地名である。

これは戸籍に登録された人民に課役を負わせる班田収授の法がくずれ、墾田が増加し荘園がつくられていく過程の中で、支配層が在庁官人や郡司層、有力な寺社に代わっていったからである。

国衙領や荘園は郡・院・郷・庄と呼ばれる行政単位になり、従来の律令制の郡郷は消滅してしまった〈そういうふうに考えてまとめてみました。地図の方を見て頂きますと、前の贈於郡のところから比べていきますと、全部で21になります。21の郡・院・郷・庄、これは小さなものまで入っています。小さな村や別府を入れて数えていくとさらに増えます。21に分けて表わしていますが、この中に次の曽野郡が出て来るわけです。〉

②曽野郡の出現

大隅国郡院郷図をみると、律令時代の贈於郡は曽野郡・小河院・財部院・深川院などと変わっているかつての贈於郡の東北部は曽野郡になっている。なんと読むのだろうか。

③曽野郡・曽於郡の読み方は？

大隅国図田帳に「曽野郡二百二十九町四段大、国方家人、曽野郡司篤守」。石築地役配符には「曽野郡」の『郡田名（段別略）・重久名・大窪・川北・田口・用松・重富・下河俣』と出て来るが、「曽野郡」「曽於郡」はなんと読むべきだろうか。

答えは、〈ソノコオリ〉とか〈ソオグン〉と読まず、二つとも〈ソノクイ〉と読むのを正解としたい〈これは私の考えなんですが。〉

平安時代末から税所氏の支配下に入った郡田・重久・大窪・川北・田口・用松・重富・下河俣などの地域は、律令制の時と同じ贈於郡の一部ながら範囲は遙かに狭い。荘園化していくなかで郡名をそのまま呼び名に使っていたとは考えられない。

〈それで、「そおぐん」という呼び方はいけないのじゃないか、ということです。〉

石築地役配符に出てくる「郡田」は。国分市清水大字郡田に比定でき、地元の人々は〈コオリダ〉と言わず、〈クイダ〉と言っている。中世のころもそう言っていたのではないか。漢字の表記には〈クイ〉の字に「郡」を充てたのだろう。郡田と同じく曽於郡の「郡」も〈クイ〉と読み、〈ソノクイ〉となったと思うが、どうだろうか。

他にこのような例を探してみたが残念ながら見つからない。ただこの例だけで〈ソノクイ〉と決め付けてしまっては、牽強附会のそしりを免れないが〈それで、何か文献はないかと思って調べてみたところ〉

『日本古代地名の謎』（新人物往来社刊）の著者本間信治氏もその著書の中で多くの「郡」のつく地名を上げ、律令制地名の解説をされている。

鹿児島県の「郡地名」では、鹿児島市郡元・志布志町岩郡・牧園町中郡・南種子町郡原・大口市郡山・日置郡郡山町・国分市郡田などを上げ、その分布の状況や命名の仕方がどうも他の地方と異なっているように思える、と述べてそれ以上の追求をされていない。

〈それで私が勝手に正解として付けた「ソノクイ」は果たして正しいかどうかということになります〉

平田（功）　伊集院に「郡(クイ)」という所があり

ます。普通に言えば「郡（コオリ）」ですが、私たちは「クイ」と言っていました。徳重神社はトッシゲと言います。伊集院高校から麦生田の方に行くあの辺一帯を「郡(クイ)」と言います。畑があったりしたもんですから「郡(クイ)の畑」と言いました。私は伊集院生まれ・育ちなんです。「郡(クイ)」とはっきり言っていました。

花園　まだ他にもあると思いますので、後でまた教えてください。

納　それは音韻変化があるのです。郡(こおり) は音で言えば「コーオ」と引っばるでしょう。そして、オは得てしてウに変化するのですね。コオリはkの子音とuとでｋｕ(ク) になるのですね。郡田はクイダと言います。大口の焼酎を祀った神社は、あれは郡山(クイヤマ)と言いますからね。それから、日置郡の郡山は鹿児島の衆はコイヤマと言いますね。

平田（功）　はい、コイヤマと言います。

花園　やっぱり「郡」というのは、「クイ」とかそれに近い音になるということですね。

浜崎　知覧にも江平先生がここで発表されたときの中に、上郡(カンゴイ)と下郡(シモゴイ)があるのですね。

平田　はい、皆さん。あとでまた質問の時間を設けますから。

花園　あとで教えて頂きたいと思います。それでは、次に参ります。

５．贈於郡の復活

①江戸幕府の地名改正

増村宏氏（昭和35年当時鹿児島大学教授）は「曽於論争」のとき、つぎのような論文を南日本新聞に寄稿されている。

「島津国史、巻二十七によれば寛文四年(1644)に島津綱久は当時帰国していた父の島津光久に代って将軍家綱から判物（領地の認証書）を賜り、また別に小笠原山城守・永井伊賀守から藩の家老島津久茂が領地目録一通を授けられた。この判物を賜るのは重い儀式であり、これを拝受した藩主光久は江戸に謝恩使を上らせている。この時に小笠原・永井両人は薩摩・大隅の郡名の改正（改悪？）を命じたのである。

これより先、正保元年(1644)、幕府（将軍家光）は諸侯に諸国の地図の提出を命じた。薩藩が地図を提出したのは五年後の慶安二年(1649)であったが、この地図には薩摩国の十四郡を、鹿児島、谷山、喜入、知覧、指宿、頴娃、川邊、阿多、日置、薩摩、伊佐、出水、高城、甑島と書いていたし、大隅国の郡では曽於、肝付の文字を用いている。

この書き方をかの両人は知覧郡は古書に見えぬからはぶけと命じ、喜入郡に入れることにした。また古名にしたがって伊佐を伊作、川邊を河邊に、指宿を揖宿、喜入を給黎に改め、また曽於を贈於、肝付を肝属に改めることを命じたのである。幕府側のいう古書とは恐らく和名抄などを指すのであろうが、幕府の当局者の薩藩の郡名、郡界の認識不足は次の事実によって知られる。

当時の伊佐郡（今の伊佐郡はその部分）を和名抄の伊作郡（以佐久：今の伊作の方面）の名称に改め当時の姶羅郡（今の姶良郡の一部：今の帖佐地方）を和名抄の姶羅郡（阿比良：今の肝属郡の一部）の名称にあらためよというものである。郡域が違うのを和名抄当時の名称で呼ぶことは、さすがに藩でも困って伊作を伊佐、姶羅を姶良に訂正してもらったが、川邊、指宿、喜入、肝付、曽於と簡単な文字で郡名を表す慣行がすでにできていたのに、当時から数えて七百年も昔の和名抄の郡名の河邊、揖宿、給黎、肝属、贈於の文字に逆転することになった。そしてその文字を以後薩藩で正式の郡名として使用していた。」（後略）

〈その郡名を右の方に書いてあります。図を見て頂きますと判りますが、江戸時代に作られた郡名が明治以後まで続いているものがあるわけです。この中で贈於郡がロヘンの贈於郡になるわけですが、これについてはこんな話があります。「曽於論争」というのを、皆さん、憶えていらっしゃいますか。

小園　新聞の日付は分かりますか。

花園　新聞の日付ですか。はい、新聞は昭和35年5月だけしか書いていませんね。

小園　わかりました。

花園　曽於論争というのは、律令時代からそして江戸時代に「贈於」という書き方になったということですが、とくにこの書き方について「ロ」を取ろうじゃないか。画数の多いのはいろんな面で困るという話が戦後出まして、ロヘンを取る運動が始まりました。それはやっぱり付けるべきだということで、いろいろ論争が起きました。ロヘンが付いていると、中には手紙にこんなのがあったそうです。ロと貝と曽が全部離れて書いてあったそうです。郵便配達の人たちは、配達するのに大体判るのだそうですけど、受け取った方がロ・貝・曽の読み方に困り笑われたという話もあって、なんとかして直さなければいけないということになったそうです。その中心になった人が、ここに切り抜きを持って来ていますが、岩川町のお医者さんで、中内四郎という方です。この方が贈於のロヘン、あるいは貝をとってもいいじゃないかというようなことで運動をされ、各町村に陳情されています。仲々、各町村は頑固ですんなりとそれを受け入れてくれない。そういう中で、このことを知った人々の意見の投書があったそうです。そういうのを見られた増村先生が贈於郡というロヘンのある使い方はあったけれども、このことばは別のことばでもいいじゃないかと書かれているわけです。そんなことなどありまして、10年ぐらいかかって現在の曽於に変ったというわけです。これを「曽於論争」と呼んでいます。律令時代の贈於郡は今の国分地方なんですが、現在の曽於郡は東の方に変って行った、ということです。最後のページを読みます。

以上の増村論文で江戸時代以降の地名表記が理解できる。－－－明治にはいってから、曽於郡の郡域の変動、郡名の呼称も変ったが省略する。

曽於郡・曽野郡〈ソノクイ〉の元祖である重久は平成の今日までその存在を誇示し続けている。

〈そういうように結んだのですが、実はもうちょっとこの後を明治以降の変遷まで書いておったのですが、先程申しあげたように高血圧で動きがとれなくなり、おまけに風邪までこじらせてしまして、完全なものを書けないままで、ここで締め切ってしまったわけです。

曽於郡(ソノクイ)についてはもう一つ、こういう話があります。平田先生は以前に大隅国府は帖佐の方に一時移動したというのを新聞に発表しておられました。これについて国分の一市民の人が曽於郡(ソノクイ)ということばをとらえて、どうしてもはっきりしない。そおぐん、そのくいが、その辺がはっきりしない、というようなことを書いてよこしておられました。そこで私は、現在、国分市の郷土誌編纂を始めておりますが、その一員として微力ながらやっているんですけれども、この曽於(ソオゾン・ソノクイ) については一通り何らかの結論を出しておかないと、郷土誌の方にも混乱が起こるのじゃないかということで、整理してみようと考えたわけです。別のことに追われて曽於郡(ソノクイ)は未解決のままにしておりましたが、２週間ほど前でしたか、平田先生の方から何か発表しないかと云われまして、曽於郡(ソノクイ)を急拠取りあげました。資料不足で申しわけないと思います。以上で発表を終わらせて頂きます。

（質疑応答）

平田　ありがとうございました。どなたからでも遠慮なく。

平田（功）　この図で見ますと、曽野と曽於とがありますね。曽於郡と曽野郡でしょう。曽野郡は

「そのくい」とは云わないのですか。

花園　「そのくい」という云い方をします。

平田　どちらも「そのくい」と読むのですね。

花園　どちらも、読むということなんです。そう読むべきじゃないかというのが私の考えなのですが。

納　もともとこれは、熊襲の「襲」。襲国であったのをば、土地の名前にきれいな文字を二つ使いなさいというお触れがありますね。

花園　はい。

納　これによって、その音だけで作って行ったのじゃないかと思うのですね。そういう例が薩摩半島の頴娃。頴娃は上の一字「頴」だけでも「エイ」と読みますね。頴娃は下に「娃」を、ただ付けただけでしょう。それから、出水。「出水」と書いて「イズミ」と読ませますね。それから鹿児島市内の場合は「和泉」と書いて「イズミ」と読ませるでしょう。それと同じように、「襲国」を「ソオ」と「オ」は長めに引っぱったかどうかは判りませんが、「襲」を「曽於」と文字を二つに分けたのじゃないでしょうか。昔、私が居った頃は、東襲山(ひがしそのやま) 西襲山(にしそのやま)というのがあったのですね。あの「襲」ですね。あの辺までずーっと囎唹郡ではなかったのですかね、昔は。それをそのまま東襲山村・西襲山村という村名が残って来たのではないですかね。

花園　今おっしゃった「襲」は、1ページの『薩隅日地理纂考』の中で、曽於のことは出ております。襲が曽於になったということは。それから東襲山・西襲山というのは明治になってからのものです。明治６年に出て来ます。東襲山郷は重久・松永・大窪・田口・川北となっています。西襲山郷は西光寺・東郷・嘉例川・朝日。現在の日当山、隼人町日当山の方になります。その前の明治２年には襲山郷になっています。明治22年、市町村制の時には東襲山村がそのまま使われています。霧島町と国分市の北側にある現在の重久、そこが東襲山になっているのです。

浜崎　これは以前にもここで出た話だと思いますが、頴娃の場合と曽於の場合とは非常によく似ていると思うわけです。和名抄を見ると、頴娃は仮名としては「江乃」と書きます。これについて、吉田東伍の『大日本地名辞書』によると、紀国が木国であったのを紀伊としたのと同じように、衣であったものを頴娃と二字化したためにそうなった。初めはあくまでも「衣」だった。だから「江乃」は削れ、『古事記伝』の中の「乃」の字は音を添えただけだから削るべしとはっきり書いているのです。曽於の場合もやはり「襲」の字が「曽野」という「野」の字が付いてそうなったのじゃないか。そういうことから考えてみると、可愛山陵・可愛小学校というのがありますが、可愛(エノ)は本来「エイ」であるべきではないか。「エノ」はひっついた形でそのまま残っているのではないか。そういう感じがするのですけれども。結局、頴娃の場合は、その「乃」は衣国とか衣評という場合に、今までは「ノ」を付けていた。源義経(ミナモトノヨシツネ) という「ノ」を付けたあれと同じだという解釈をしているようです。

江之口　全くその通りですよね。「あの」とか「その」とかいうものなんかもそうですね。だから曽野も表記の時点では「襲」という古代の地名が生きていたということも考えられるのではないでしょうか。

納　ことばとして使う場合に「曽」と「於」は普通くっつけて云っている。書く場合は「曽於」はそのまま音をとって書いているのじゃないでしょうかね。出水郡に「特牛(コッテ)」という所があります。古い文書を見ていると、これを「コットイ」と読ませているわけです。コットイ(kottoi)のオイ(oi)が鹿児島方言ではエ(e) に変化するわけですね。それで、これは「コッテ」になるんですよ。それと似たようなもので、意味も何も考えずに、音を文字で当てるために「乃」を付けたり、色々しとるのじゃないですか。

平田　宮崎県西都市のそばに、同じようなのがある（板書）。こっちは曽於郡、宮崎県は都於郡。これは「トノコオリ」と読んでいますから、これが一番よい比較材料になると思います。

藤浪　今、曽於・曽野をどのように読むかというのが問題になっているのですが、私たちがよく知っている台明寺文書。さっき話に出ました国分市郡田の古い天台宗の寺。台明寺文書に鎌倉時代の土地の売券が出て来るのです。これには平仮名だけのものも入っていますから、それらを見てみると、一つは「そのこほり」という書き方があるし、「そのぐんじ」も出て来ます。年代的には文暦二年(1234)です。例の税所氏にかかわる領地ですから、郡司の名前や売券の土地の所在などが出て来ます。その分布を押さえて行けば今云った曽於郡・曽野郡の範囲というのは、ある程度押さえられるのではないかと思うのです。だから、これを見た感じでは、さっきから云っている話し言葉と書き方：表記の問題ですね、曽於はちょっとはっきりしませんけど、台明寺文書には「そのこほり」というふうに書いてあります。「そのこほり」が「そのくい」に変化したのか、そこら辺がまだちょっとはっきりしませんが、そうように文献からは考えられます。

花園　台明寺文書、たまたま手元で見たものがあるものですから引用しました。まだ一部しか見ていないのですが、今おっしゃったような書き方の所も出て参るようです。それと建久図田帳の方でも、これは沢山は出て来ませんけども、今おっしゃるような形でこれらの分布を見ていけば、曽野郡(ソノクイ) の範囲をまとめていけるのではないかとは考えます。

江之口　今思い出したのですけど、図田帳に「曽野永利」というのが出て来ますよね。現在地は未詳です。川内の永利と同じような、曽野永利。だから12世紀末には「曽野」という呼び方は出来ているわけですね。それと、曽於郡。「クイ」というのが何ですかね。ちょっとまだ判らんのですけどね、そういうふうになるのが。それと、いつ頃から云うようになったのか。その辺が話を聞いていてもピンと来んもんですから、ちょっと教えて下さい。

花園　郡(クイ)という云い方になったのは私もこれをまとめながら、まだ把握していません。税所氏というのがおりますから、霧島神宮とか鹿児島神宮の税をつかさどる税所氏が出て来てから後になるとは思うのですけれども。はっきりそれがいつというのは文献上では、その最初に出て来るのは1132年ですかね。それが初見なのかどうか、その辺はまだ私も押さえておりません。

江之口　その音韻変化でコオリダが「クイダ」になるのかということですね。まだ、ピンと来ない。

花園　これは私もまだ判らないのです。ただ一例だけで書いたのですが。平田先生、これはどうなんですか。

平田　さぁ、何ですか。（笑い）

浜崎　知覧だけが上郡(カングイ)下郡(シモグイ)であって。

平田　伊集院も郡(クイ)があったでしょう。知覧の上郡・下郡と、それから郡山(クイヤマ)はどこだったか。

平田（功）　郡山(コイヤマ)。

平田　いや、大口が郡山(クイヤマ)か。

納　大口が郡山(クイヤマ)。

平田　だから「クイヤマ」という読み方もあったということですね。「コイヤマ」もあった。

納　「コオリ」の場合ですね、仮名書きにすれば発音どおりに書いていくわけですね。共通語の郡というのは、kohoriですね。koriと長音になります。長音の場合は、ou：オウになります。大風はウカゼでしょう。大水はウミッが出たでしょう。ou:オウ が鹿児島語では u:ウに変化するわけですね。それから「リ」の場合はですね、鹿児島語はよく「r」が脱け

るのです。ri:リがi:イ になってします。kou:コウも ku:クになりますから、kouri は kuiになりますね。それで鹿児島の場合、郡山(コオリヤマ) は「コイヤマ」郡元(コオリモト) は「コーイモト」と云いますね。「r」がなくなって koiyama,koimotoというように、鹿児島語の音韻変化ではそうなります。

平田　逆には考えられませんか。倒えばですね、大崎鼻を「ウサッバナ」と云いますね。それから、漢字で読めば大戸(オオト)。オオトよりも鹿児島ではウトという表現が多い。「ウ」という云い方が古く、それが標準語的になって大戸というふうになった。そう考えたら「ウ」が付く地名が「オオ」というふうに中央の言葉に引っぱられて変化した。

納　中央の言葉が入って、いわゆる「ウ」が「オオ」に変化したーーー。

平田　そうそう。

納　そういうのもありますね。

平田　そういう考え方の方が理解し易いのですがね。例えば「クイヤマ」と云っていたのが中央から入って来て「コオリヤマ」というようになった。

納　その逆も成り立ちます。

浜崎　「郡」という字は、昔は「評」と書いた。そういうことでしょう。これについて『広辞林』を書いた人たちは「コフリ」だ、ということを云っている。「フリ」は村で、「コ」は大きいという意味だ、と。これは金沢庄三郎の説、『広辞林』に関係した人ですが、『古代朝鮮語の研究』というのを出しています。その中に「コ・フリ」だとして、フリは村の意味だと説明している。それで、大化の改新以前は郡は「評」であった。それが「郡」に変った。だから読みはあくまでも「ホリ」「コホリ」だ、と。

江之口　性格も変って来るでしょうね、時代によって。

浜崎　それが何故「郡」になったか。途中で変化しない郡もあるのです（笑い）。指宿のあたりは昔の通りの「郡」なので。ところが、いつからそんなに訛ったか。どこかに原因があるのじゃないか。そんな感じがするわけです。特定の地方だけが「郡(グン)」ですから。郡(グン)とか郡(ゴイ)となれば、上郡(カンゴイ)・下郡(シモゴイ)とか、“あたいは上郡(カンゴイ)ごあんど”というような気がするのですが。

江之口　地名の方言というのは確かに難しいですよ。だって、古文書には方言で出て来ないもん。だから、方言がもともとなかったのか。あるけれども、わざわざ標準語に直して表記したのか、という問題もあります。それは難しいですよ。

浜崎　これからの問題で是非一つ揖宿人として提案したいのがあります。今出て来た揖宿郡。これがある特定の新聞社だけが「指宿郡」と書くのです。あたり前に書く時には、特別に頼まなければやらない。死亡広告のごとき。これが「指宿郡頴娃町」と書かれる。ところが、葬式屋の主人はあたり前の活字の葉書を配る。新聞などの広告では「指宿郡」と出て来る。これをいくら云うても訂正してくれないのですよ。某新聞だけなんですけど。（笑い）

平田　某新聞というのは、何新聞？

浜崎　テレビは当り前にやってくれている。それだけはやってくれている。それで時々、抗議しますけど、これは昔からその通りだ、と。こういうことを云っておるんです。直接新聞社に行って聞いてみたのですが、編集局に聞くことは聞いてみます、と云ってはいるのですが、なかなか直りません。お陰で、この前、免許の切り替えに行ってみますと、頴娃の警察署は「指宿郡」ではありません。これ（揖宿）ですと云うて、頴娃の人間に揖宿郡の説明を受付でする。（笑い）

平田　確かに郡名は難しい漢字（揖宿）を使いますよね。それから指宿市は「指」を書かせますね。やっぱり、行政呼称としては二通りきちっと使い分けられているわけですから。

浜崎　地名はちゃんと登記してあるわけですから。

平田　そうですね。

浜崎　戸籍法によっても「指宿郡」では受け付けないわけですから。

二見　現在、「嚙嗽」は、これ（曽於）でないといけないのですか。

平田　今は、そうですね。（笑い）

浜崎　ちゃんと戸籍法ではそうなってるからいいわけでしょうけど。頴娃ではそういうことで困っているのですが。地名の混乱ということで、是非一つノロシをあげて頂きたい。われわれが個人でやっても駄目だということが、よく判りました。

平田　結局、費用の問題でしょうね。ハンコから変えたら相当な費用になるでしょうから。

浜崎　それともう一つですね。私は文化財保護審議会委員になっているのですけど、文化財保護法には「地名」ということについての文句は一つも入っていないのですよ。名勝・史跡とか埋蔵文化財とか建造物とかあるのですが地名はない。それで文化課に聞いても地名は大事だ、貴重な文化財だと云いながら法の中にはうたってないのじゃないか、それはちょっと難しい、学問的にはまだ確立していないとかなんとか云って、県の先生方は云われるのですが、何か一つ、地名研究会あたりで、名乗りをあげて頂けませんか。（笑い）

平田　文化財保護法に加えさせなきゃいかんですね。

浜崎　こういうような大事な地名がですね、今、土地改良でぐゎらぐゎらとなって、場所が変ったりいろいろするでしょう。そうすると、適当に耕地課あたりで決めてしまう傾向がある。議会なんかで文句が出ればいいけど。出ないところでは、どうにもならんのです。

平田（功）　さっきの郡(コオリ) と関連して、それじゃなくて、例えば大田と書いて「ウタ」と読む。

平田　あぁ、伊集院の。

平田（功）　はい、伊集院の大田。私たちはウタ、ウタと云っていました。だけど今は、教育を受けた方は皆「オオタ」とおっしゃるのじゃないでしょうか。そのように地名は段々ウタが廃れて行って、いわゆるオオタに自然になるのじゃないかと思うのです。郡(クイ)も、私たちは郡(クイ)の畑とか郡(クイ)のだれそれさんと云いよったのですけど、今はもう郡(コオリ) とはっきり皆さんおっしゃいますし、むしろ郡(クイ)と方言を使う方が笑われるというか、そういう気がします。

江之口　行政に対する啓蒙も必要でしょうけど、われわれ自身が身近な所を記録するということも大事でしょうね。自分が動かなければ、人々に頼むことばかりではやっていけませんから。出来るだけそれが消えないうちに記録しておくべきでしょうね。

平田（功）　私がこの地名研究会に入りましたそもそもの最初は、実は川内の歴史散歩に行きました時に「渡唐口(トトンクッ)」の話が出ました。方言では「トトンクッ」というのですが、それを「トトウクチ」とおっしゃったものですからね。些細なことですけど非常に疑問を感じまして、それがきっかけで入った次第です。トトンクチと云った時には目的も含む使い方になるのではと思うのです。「何処へおさいじゃすか？」「いっとっ、トトンクチ行たっきもんそかいち思っ」と、こげんなって来るのじゃないかと思ってですね。同じ方言なんだけど、何か変なこだわりを感じました。それがきっかけだったのです。

平田　地名では土地の人が何と呼ぶかが一番大切なことなんです。標準語化した呼び名に変って来ますから、それが行政の力で一般化しますから、古い歴史的な呼び名というのを、きちんと押さえて行くのが一つの仕事だ、ということです。

それから段々時間もなくなりましたが、曽於郡の

範囲その他で述べたいことがあります。2ページに私の国分物語を引用されておられますが、これは10年程前に書いたものです。まず、答西。すなおに読めば「トウセ」です。その後、姶良町山田に「当畝町」(トウセマチ) という地名が出て来たので現地に行ったのですが、これは「畝町(セマチ)」という云い方にも近いので、比定は出来ませんでした。何故これをタカセと読んだかということを説明しておきます。本来は「コウセ」というふうに聞いたのを「合西」と書いた。これは読めないので、ルビに竹を付けた。これが一緒になって、こんな字が出来たのじゃないか。竹合西→答西と推定して「タカゼ」という比定を考えました。正直なところ、この答西(トウセ) 郷がどこになるか、まだ判りません。稲積郷もまだ決め手がありません。溝辺町竹子(タカゼ) の神社が「稲積神」を御祭神としています。また7世紀末の稲積城の比定地としても考えなければならないものです。各地にある「稲積」という地名を見て回って写真を撮って来る仕事があるのですが、まだ果たしておりません。稲を積み上げたような山があると思うのです。それにもとづいた地名なので、稲積という地名を全部回ってみて、どのような形の山を稲積と呼んでいるのかを確かめることが必要だと思うのです。

その次、広西は方後(カタシリ)との関連で説明がつくと思います。豊国は一番豊かな所ですから、加治木から帖佐にかけての地域だろうと思います。そして桑原国府を帖佐にもって来ましたが、建久図田帳によると、帖佐が一番田数が多いのです。帖佐に桑原郡の中心があったということは、建久図田帳からも考えられるわけです。桑原国府というのは、それに結びついて来ます。

それから、桑善(クワアシ)とわざわざ読みましたが、和名抄の郷名では、これ（善）をヨシと読むかアシと読むかについて、善積(アシヅミ)と読む郷が一例あったと思います。松永に芦江神社・芦江川というのがあります。これが後の桑東郷の中心地になろうかと思います。それで松永あたりを比定地に考えたらよかろうと思います。

それから噌唹郡。表紙に志布志の方にもって来た方がいいのじゃないかと云われたのですが、噌唹郡が明治になってから東噌唹郡と西噌唹郡に分かれます。建久図田帳の段階では、財部院や末吉すなわち深川院がすべて大隅国に入っております。果たして和名抄の頃に財部や末吉あたりが大隅国であったかということは疑問だと思うのです。財部については和名抄に諸県郡の郷名に財部とはっきり出て来るのです。建久図田帳では大隅国に入っているために、財部郷の比定は宮崎県の方で苦労しているのです。財部郷は諸県郡の方だろうと思うのです。そう考えると、建久図田帳の頃までに日向国と大隅国と入れ替っていると思わなきゃいけないのですね。都城の隣の財部と深川あたりは、日向国所属と考えるべきじゃないかと思うのです。それが一点ですね。

それから建久図田帳では、牛山：牛屎院は薩摩国に入っていますが、これも和名抄の段階では菱刈郡に入れなきゃいけないのじゃないか。それを割り切らなければ、郷名比定が全部狂って来るわけです。そうすると、和名抄段階の噌唹郡というのは財部を切り、深川を切り、残ったいわゆる明治の頃の西噌唹郡の範囲で求めなければならないと思うのです。そうすると、②噌唹郡の郷名として、葛例（福山）・志摩（桜島）・阿気（？）・方後（隼人）。これは広西郷と入れ替りですね。人野郷が垂水市に連なるとなると、残る所は国分市・霧島町の阿気郷。これは噌唹郡の中心地になければならないということですね。消去法でいくと、この阿気郷というのは曽於郡(ソノクイ)ですよ。書き方がしくじって向気が阿気に化けたと解釈できれば楽なんですけどね。確かに略して書く場合には化ける可能性があるわけです。そうすると、向花（阿気）というのが、国分市重久いわゆる曽於郡(ソノクイ)の地名：郷名だったと解釈出来るのじゃないでしょうか。それから、中世の頃は清水の方が中心で、国分の方は廃れていたのじゃないでしょうか。南北朝時代、清水の本田氏に国分寺の面倒をみよとの命令が来た史実があります。結局、噌唹郡の中心地は清水・重久・向花・国分あたりだということになる。消去法でいくと、それしかないわけです。だから噌唹郡の中心はこちらという最初の解釈でいいのじゃないですか。

花園　そうですか。

平田　他に、何かないでしょうか。

二見　私も、答西（タカゼ？溝辺）と書いてありますから、古いのだなぁ、と興味を持ちました。

平田　あれは、まぁ強引な解釈なのです。あれはまぁクエッション＝マークを打っておいて下さい。

二見　先生。これはいつまでに解決するつもりですか。

平田　何を？

二見　クェッション＝マークがなくなるのは。早く解決してしてもらわなくては。（笑い）

平田　発掘調査で、何か決め手が出て来なければいけませんよね。ものが出て来なければね。

二見　それから、薩摩国と大隅国を結ぶ官道ですか。蒲生と説明されましたね。

平田　はい。

二見　蒲生郷が大きな意味をもっているのでしょう。道路か、何か。

平田　蒲生駅ですね。

二見　あぁ、蒲生駅。

平田　蒲生駅は、蒲生町の早馬。そういう地名の近辺にあるのでしょうね。じゃー、12時になりました。次のグループの会が1時からですから片付けをお願いします。

本田親虎先生からの便り

拝復　長らく御無沙汰いたしまして失礼を重ねておりますが、これはみな老骨の痛みのわざによるものですからお許しいただきたいと存じます。

この度は地名研究会の記録をわざわざ御届け頂きましてありがとうございました。この頃は自分の体が動かなくなったものですから、昔の思い出を思い出して、しきりになつかしがっています。平田先生の「ぐみ崎のぐみ」を読みまして、久見崎や対岸の京泊の海岸のあの広大なぐみの木やぶと白砂青松の美景を思い出すことでした。

私は大正末期から昭和初年代に七年間亀山小学校に勤めていましたので、毎年三月の別れ遠足は千六百人の全校生徒全員が京泊の海岸で遊ぶ例になっておりましたし、あの京泊のぐみの木の大やぶにはいりまして熟したぐみのみをどんなにたらふくたべてもてべきれないほどの大やぶだったことのおもしろさや、松林の中で採った松露のうまかったことなど六十数年昔のあのすばらしい景観は、再び見ることのできなくなった現状と比べあわせてみて、あの頃の日本はすばらしかったなぁと懐しんでいます。

太平橋の下の大小路側には広い川敷があって、そこでは毎年サーカスや花火大会などがありましたし、夏のおぎおんさぁ祭りの夜宮はにぎやかでしたし、河川敷もなくなったし、この頃のぎおんまつりはどうなっているのだろうなどと思いますと、近代化合理化で失われたものの大きさがなつかしくてたまりません。

秋の運動会を思い出しますと、拡声器というものなかった時代の運動会では、映画館の太平座の楽士たち五〜六人を招じてブラスバンドで賑かさを盛り立てたものでした。それも川内にある四小学校（隈之城・川内・平佐・亀山）のうちのどこが一番

早く太平座の楽士をつかまえるか、競争みたいになっていましたので、この方の係りに亀山では音楽主任の本田をきめていました。ですから私は、毎年二学期になると早々と太平座に行って礼をつくして楽士たちにたのみこんだものでした。映画館の楽士のような職業の人は一般普通人とは少々ちがった性格の人が多かったようで、ちょっとの失言でも、とんでもない事件に発展することがあったものでした。しかし、太平座の人たちは毎年私のいうことをよく聞いてくれました。

亀山で拡声器を使い出したのは昭和六年秋の運動会からでした。それも理科主任の手製品で、高価な電機店のものではありませんでした。当時はラジオ体操が始まってから、まだ二三年しかならないという時代でしたから、学校でのラジオ体操は講堂のピアノでラジオ体操の曲を私が弾いいて、そこから百メートルばかりある前庭までコードを引いて拡声したものでした。全く原始的な時代でしたが、その不便さが何ともいえずなつかしいのですから、おもしろいものです。

こんなことは平田先生方が生まれられた時代の話ですから、現代の人々にはばかばかしく見えるかも知れません。

甲突川と石橋問題ではいつも貴重な御意見を発表していただいて、ありがたいと感激しています。県や市の役人たちの頭はどうかなっているらしく、文化財の大事さも調査研究の大事さもわきまえないこちこち頭の持主ばかりのように思われて腹の立つことばかりです。今後もよろしく県民を御啓発下さるよう願いあげます。会報の送料を同封しておきます。会員のみなさま方によろしく申し上げてください。

今日は宮之城から客がありました。二十数年前、入来ライオンズの発会式で全国から集まった六百人の会員達へ東郷重政さんの御親父の重毅先生直伝の示現流を当地の東郷氏と私とで演じてびっくりさせた話をしますと、今でも見たいといいました。卒寿過ぎた駑馬は役立たずになったことを云って笑いあった次第です。匆々不一

平成六年九月二十一日　　本田親虎

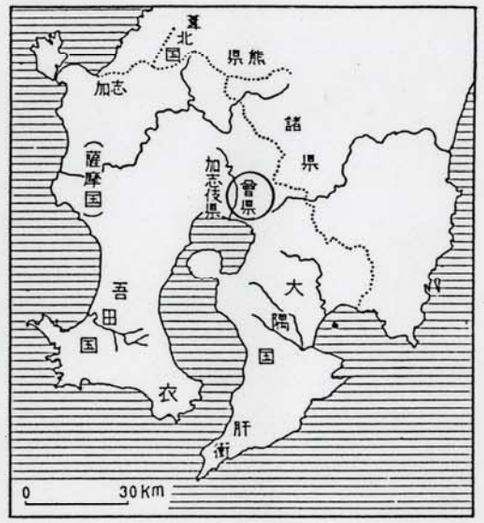
第　４３　回

鹿児島地名研究会
例　会

問題提起資料

「曽於郡」という地名について

花　園　正　志



古代地名図（鹿児島県史による）

（期日）　平成５年１２月５日（日）

（場所）　鹿児島県教職員互助組合会館

「曽於郡」の地名について

１　「贈於郡（　）の曽於郡（　）」をどう読む？

①　薩・隅・日惣高並郡郷村調　（鹿児島県史料集　２４）　隅州編　７６頁

> （贈於郡）
> 一　曽於郡（　）　　士弐百弐拾八人　　五ケ村　　狩夫百八十三人
> 高五百弐拾壱石余
> 士惣人数八百七拾三人
> 高四千七百七十五石三斗二升五合四勺三才
> 田口・大小保・松永・川北　（重久）

②　薩隅日地理纂考

> （贈於郡）
> 此郡名は日本紀ニ襲高千穂峯トアル襲ヨリ出タリ。景行天皇紀ニ悉平襲国トアル襲国ノ遺称ニテ、倭名鈔ニ大隅国囎唹曽於トアル是也。贈於トアルハ紀国ヲ紀伊、頴ヲ頴娃ト書ルナドト同ジ。東北日向諸縣郡ニ界ヒ、南大隅郡ニ連リ、西北桑原郡ニ接ス。
> 郡内八ケ郷ヲ置ク。　　襲山　清水　国府　敷根
> 恒吉　市成　福山　財部
>
> （襲山郷）
> （前略）
> 村落九　　田口村　大窪村　川北村　松永村　重久村
> 朝日村　佳例川村　東郷村　西光寺村
> （後略）

③　建久図田帳　（建久８年　１１９７年）の中に、

☆　曽野郡二百二十九町四段大　　曽野郡の読みは（　　）

☆　小河院三百四十八町三段大

☆　桑東郷百八十九町四大

3　曽於郡の分割

①　菱刈郡と桑原郡の分割

隼人征討に成功した朝廷は当然のことながら大隅国の支配を強めていった。贈於郡の分割も進められている。続日本紀に「天平勝宝7年（755年）大隅国菱刈村の浮浪九百三十余人郡家を建てんことを請うて許される。」とある。

さらに、桑原郡も分置されているが、はっきりした年代は分からない。天平勝宝7年（755年）の菱刈郡の設置以後から延暦23年（804年）の間と考えられる。（右図参照）

大隅国郡郷図

（国創置～桑原郡創置）

日本後紀の延暦23年の記事の中に桑原郡蒲生駅という地名が出てきていることからこの頃にはすでに桑原郡が設置されていることになる。

桑原郡内の郷名は和名抄によると、大原（吉田・蒲生）大分（姶良？）豊国（加治木？）答西（溝辺？）・稲積（　？）広西（国分市広瀬）・桑善（　？）仲川（牧園）の八郷になっている。

なお、郷名のルビと地域の比定は国分物語（平田信芳先生著）による。

②　囎唹郡の郷名

和名抄に葛例（福山）・志摩（桜島）・阿気（？）・方後（隼人）・人野（垂水市牛根）の五郷となっている。郷名のルビと地域の比定は桑原郡の比定と同じく国分物語による。

囎唹郡と桑原郡の郡界ははっきりしない。国分平野の西部は桑原郡に、東部は囎唹郡に属していたとばくぜんとしかいえない。平安末期から脚光を浴びる「曽野郡」ははどこにひそんでいるのだろうか。

4　曽野郡の出現

①　大隅国に新しい郡・院・郷誕生

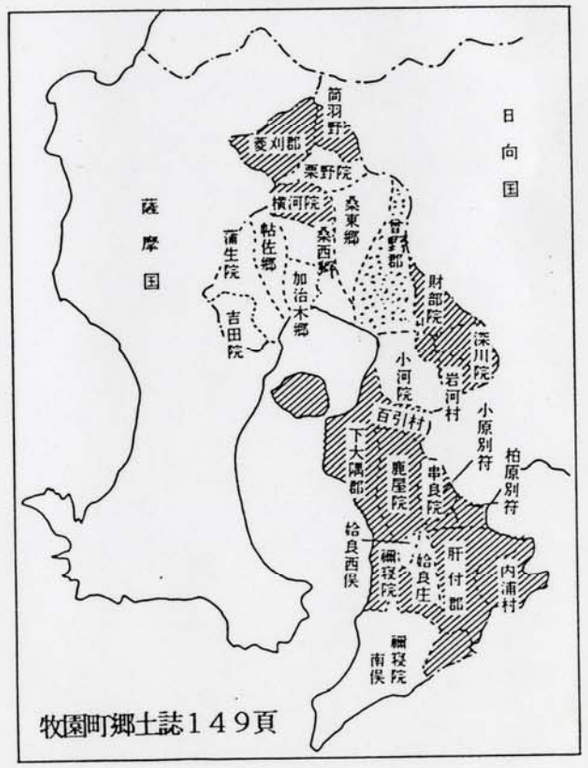
源頼朝が鎌倉幕府を開いた6年後の建久8年（1197）に書かれた土地台帳に建久図田帳というのがある。この中に大隅・薩摩の図田帳の写しが残っている。この図田帳や建久9年の在庁注進御家人交名、弘安の役前の建治2年（1276）の石築地役配符、清水の古刹台明寺の文書などを参考にして大隅国郡院郷の地名を地図化したのが下の地図である。この地図は中世の大隅国郡院郷図として定着している。地名が記入されている牧園町郷土誌149頁の地図を一部訂正して借用させていただいた。

この地図をみると、律令時代の郡名は狭い地域に残ったり、また消えてしまっている。一方、郡にかわり出てきたのが、院・郷・庄のつく地名である。

これは戸籍に登録された人民に課役を負わせる班田収授の法がくずれ、墾田が増加し荘園がつくられていく過程の中で、支配層が在庁官人や郡司層、有力な寺社に代わっていったからである。

国衙領や荘園は郡・院・郷・庄などと呼ばれる行政単位になり、従来の律令制の郡郷は消滅してしまった。

大隅国郡院郷図



牧園町郷土誌149頁

②　曽野郡の出現

大隅国郡院郷図をみると、律令制時代の囎唹郡は曽野郡・小河院財部院・深川院などと代わっている。かっての囎唹郡の北東部は曽野郡になっている。

なんと読むのだろうか

③　曽野郡・曽於郡の読み方は？

大隅図田帳に「曽野郡二百二十九町四段大　　国方家人　曽野郡司篤守」。石築地役配符には「曽於郡」の『郡田名（段別略）・重久名・大窪・川北・田口・用松・重富・下河俣』と出てくるが、「曽野郡」「曽於郡」はなんと読むべきだろうか。

答えは、<ソノコオリ>とか<ソオグン>と読まず、二つとも<ソノクイ>と読むのを正解としたい。

平安時代末から税所（さいしょ）氏の支配下に入った郡田、重久・大窪保・川北・田口・用松・重富・下河俣などの地域は、律令制の時と同じ噌唹（そおぐん）郡の一部ながら範囲は遥かに狭い。荘園化していくなかで郡名をそのまま呼び名に使っていったとは考えられない。

石築地役配符に出てくる「郡田」は、国分市清水大字郡田に比定でき、地元の人々は<コオリダ>と言わず、<クイダ>と言っている。中世のころもそう言っていたのではないか。漢字の表記には<クイ>の字に「郡」を充てたのだろう。郡田と同じく曽於郡の「郡」も<クイ>と読み、<ソノクイ>となったと思うがどうだろうか。

他にこのような例を探してみたが残念ながら見つからない。

ただ、この例だけで<ソノクイ>と決め付けてしまっては、説得力にかけるし、牽強附会のそしりを免れないが ――――――。

「日本古代地名の謎」（新人物往来社刊）の著者、本間信治氏もその著書の中で多くの「郡」のつく地名を上げ、律令制地名の解説をされている。

鹿児島県の「郡地名」では、鹿児島市郡元、志布志町岩郡・牧園町中郡・南種子町郡原・大口市郡山・日置郡郡山町・国分市郡田などを上げ、その分布の状況や命名の仕方がどうも他の地方とは異なっているように思える、と述べてそれ以上の追及をされていない。

5　噌唹（そおぐん）郡の復活

①　江戸幕府の地名改正

増村宏氏（昭和３５年当時鹿児島大学教授）は「曽於論争」のとき、つぎのような論文を南日本新聞に寄稿されている。

「島津国史、巻二十七によれば寛四年（１６４４）に島津綱久は当時帰国していた父の島津光久に代わって将軍家綱から判物（領地の認証書）を賜りまた別に小笠原山城守、永井伊賀守から藩の家老島津久茂が領地目録一通を授けられた。この判物を賜るのは重い儀式であり、これを拝受した藩主光久は江戸に謝恩使を上らせている。この時に小笠原、永井両人は薩摩、大隅の郡名の改正（改悪？）を命じたのである。

これより先、正保元年（１６４４）幕府（将軍家光）は諸侯に封国の地図の提出を命じた。薩藩が地図を提出したのは五年後の慶安二年（１６４９）であったが、この地図には薩摩の十四郡を鹿児島、谷山、喜入、知覧、指宿頴娃、川邊、阿田、日置、薩摩、伊佐、出水、高城、甑島と書いていたし、大隅の郡では曽於、肝付の文字を用いている。

この書き方をかの両人は知覧郡は古書に見えぬからはぶけと命じ、喜入郡に入れることにした。また古名にしたがって伊佐を伊作、川邊を河邊に、指宿を揖宿、喜入を給黎に改め、また曽於を噌唹、肝付を肝属に改めることを命じたのである。幕府側のいう古書とは恐らく和名抄などを指すのであろうが、幕府の当局者の薩藩の郡名、郡界についての認識不足は次ぎの事実によって知られる。

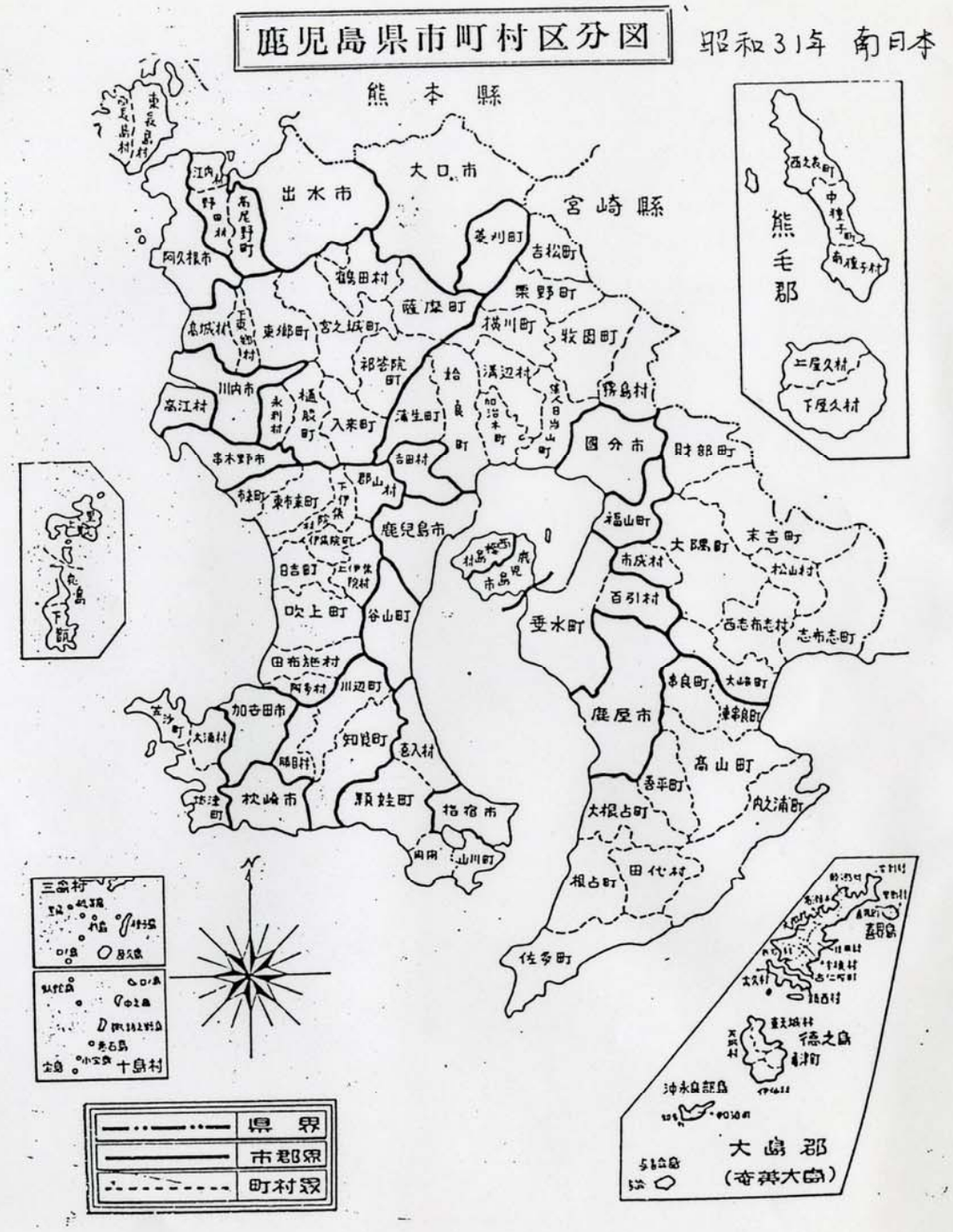
当時の伊佐郡（今の伊佐郡はその部分）を和名抄の伊佐郡（以佐久・今の伊作の方面）の名称に改め、当時の姶羅郡（今の姶良郡の一部・帖佐地方）を和名抄の姶羅郡（阿比良・今の肝付郡の一部）の名称にあらためよというのである。郡域が違うのを和名抄当時の名称で呼ぶことは、さすがに藩でも困って伊作を伊佐、姶羅を姶良に訂正してもらったが、川邊、指宿、喜入、肝付、曽於と簡単な文字で郡名を表す慣行がすでにできていたのに、当時から数えて七百年も昔の和名抄の郡名の河邊、指揖、給黎、肝属、噌唹の文字に逆転することになった。そしてその文字を以後薩藩で正式の郡名として使用していた。」（後略）

以上の増村論文で江戸時代以降の地名表記が理解できる。（下図参照）
これ以上の多言も要るまい。

明治にはいってから、曽於郡の郡域の変動、郡名の呼称も変わったが省略する。

曽於郡・曽野郡<ソノクイ>の元祖である重久（しげひさ）は平成の今日までその存在を誇示し続けている。

（未完）



地名研究会報

第４４号
平成７年３月５日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第４４回例会　　平成６年３月６日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・江ノ口汎生・小川亥三郎・小川秀直・納　栄蔵・片岡八郎・能勢正之・浜崎盛雄・肥後芳尚・平田功美子・平田信芳・松浪由安（計１２名）

Ⅱ．甕藩名勝考読会　　P.150 ～ P.153

（話題となった事項および地名）　鹿児島神社・大浜・炭俵（ダツ）・花瀬・砥石・清音と濁音・建部神社・根占＝西目説

鹿児島神社

平田　鹿児島神社というものが、三つあります。大隅国一之宮の鹿児島神宮。垂水の鹿児島神社、そして草牟田に宇治瀬神社というのがあり、これが昔鹿児島神社と言っていました。この三つをつなぐとその中にすっぽり桜島が入ります。したがって鹿児島神社の神奈備山といいますか、鹿児島というのは本来、桜島を指した神名だと思われます。

納　垂水の鹿児島神社ですが、垂水の桟橋を降りて真っ直ぐ入って、あれは国道 220号線ですかね。

平田　鹿屋というか、新城の方に行くのですよ。

納　あぁ、新城の方に行くのですか。川を渡ってからですか。

平田　川の手前です。

納　ははぁ、あの手前。左側のあれですか。

肥後　垂水では下之宮神社と言っています。

納　下之宮神社ですか。それで分かりました。

肥後　それと、道路沿いのあの神社は、あれは何といいますかね、上之宮神社。「カンノミヤ」

納　それと、下之宮ですか。

肥後　えぇ、上之宮と下之宮。

平田　垂水には台地の上に大きな神社があって、確か駿河神社というのがありましたよ。どこから行くのだったか、よく憶えておりませんが。

肥後　駿河ですか？

平田　えぇ、駿河国と同じ字です。桜島がよく見えるのですね。何故こんな所に大きな神社があるのだろうと不思議に思ったことがありましたよ。確か、田神の付近だったと思うのです。

肥後　田神？柊原の辺かな。田神ですか？

根占・大浜

平田　根占という地名は古くから出て来るのですが、まだよく分かりません。昔から、対外貿易で栄えた所だということです。

肥後　今の雄川の河口のところに、大きな楠があるのですね。昔、商船をつないだといわれます。それから櫨（枦）。鹿児島で琉球枦を栽培したのが桜島という説があるのですね。それと、この根占。船を修理したという話がありますし、私は根占じゃないかと思うのですけども。それから南に行って、大浜の先に辺田という所があるのですが、そこは藩政時代に枦を栽培したのが現在も木がずーっと残っています。ここでは昭和の初め頃まで蠟をしぼっていたようです。

平田　そうですか。あの辺は眺めのよい所ですね

肥後　そうですね。大浜も眺めのよい所で、歌もいくつか出ていましたけど。それと日露戦争のとき

に信濃丸からの知らせを受けた所ですね。

納　あすこに記念碑が立ててありましたけど、今もありますか。

肥後　あります。それから152ページの上の方に眉山とありますが、これは恐らく辻岳じゃないかと思うのです。辻岳というきれいな丘があります。

平田　あぁ、そうですか。

肥後　ほんとにきれいな山です。

平田　大浜から硫黄島の煙が見えるのですね。

肥後　ほんとに眺めのよい所です、大浜は。

炭俵（ダツ）

納　話は別ですが、先日、新聞の薩摩狂句の欄に炭俵のことが出ていましたが、あれは鹿児島方言で何と言いますか。

肥後「ダツ」と言います。

納　やっぱり、「ダツ」と言うのですか。

平田　何ですか？「ダツ」

肥後　えぇ、「ダツ」

平田　どんな字を書くのですか。

肥後　うーん。

納　「ダツ」というのを、種子島で聞いたことがあります。中種子の方だったと思いますが、炭俵を編むのを「ダツを編む」と言っていました。それで先日新聞で炭俵に「ダツ」と振り仮名が振ってあるので、種子島語がこっちにもあるのだろうかと思って、お尋ねしたわけです。どうもありがとうございました。

肥後　えーと、ダツをですね、東京で島津家文書を読んだのですけど。どういう字だったか、ツは津ですね。上のダは何という字だったか、ちょっと忘れましたけど。意味と違う字が書いてありました。他所では分からない特殊な方言です。

花瀬・硯石

肥後　152ページの花瀬川。ここは斉彬公がよく、よくと言っても年に１回が２回でしょうけれども、遊びに行かれてあそこで茶を立てて飲まれたという言い伝えが地元にはあります。

平田　あすこは藤がきれいなんでしょう。

肥後　そうですね。

平田　ツツジは見なかったなー。花瀬は流れが花のように見えることと、ツツジとか藤の花がきれいな所という両方が引っ掛けてあるのでしょうね。

肥後　そうでしょうね。今日、これを読んで硯が産出されるとは初めて知りました。あすこにもありますね。牛根の二川にも。

平田　あぁ、そうですか。

肥後　えぇ、三国名勝図会に書いてあります。

平田　三国名勝図会は各郷の末尾に特産物が書いてありますね。

肥後　ずーっと並んでいます。地元の人に聞くのですけど、どこが産地なのか、場所は分かりませんでした。

平田　硯にするのでしたら、古い地層でしょうね

肥後　そうですね。

浜崎　硯石の産地とありますが、今でも出るのですか。

肥後　さぁー、ここはちょっと。

浜崎　奈良時代の大隅国の「調」な中に、砥石を出したと書いてあります。砥石と硯石は、大体同じようなものじゃないのですか。

肥後　そうですね。

浜崎　砥石を出したのは、花瀬川のことじゃないかと思って、ですね。

肥後　現地で尋ねると、その場所が分かるかも知れませんね。

清音と濁音

浜崎　それと、もう一つ。例えば大根占。オホネシメ。揖宿の場合は、イフスキ。喜入の場合は「岐比礼」とあります。これは「キヒレ」と実際に読んだものか、いつ頃「キイレ」になってしまったのかその辺の移り変りというのを教えて頂けませんか。

平田　それは難しい。国語学でも問題になるのでしょうけど。そうですね。今日お渡しした「植物に由来する地名」の「蒲生」を例にとりますが、「カモウ」が「ガモウ」に変るのと大体並行するのじゃないですかね。古い時は「カモウ」で、新しくなって来ると「ガモウ」。鎌倉時代以降でしょうね、変って来るのは。関東武士が全国に拡がってから関東流の呼び方が広まって行くことによると思います。

浜崎　それから、われわれは開聞神社（かいもんじんじゃ）とか照国神社（てるくにじんじゃ）と言いますが「ジンシャ」じゃなくて「ジンジャ」だ、と。開聞神社に行くと「じんしゃ」と仮名を付けてあります。方言の牛留先生などは「じんじゃ」が正しいと、はっきり言っておられます。また、広辞苑などには「じんしゃ」となっていますし、鹿児島の人たちは照国神社を「じんしゃ」と言っております。

平田　「じんしゃ」と「じんじゃ」の問題については浜崎三さんが欠席の時に説明したのですが、鹿児島では現在でも「じんしゃ」という表現が残っています。しかし日本全国では「じんじゃ」に変っているのです。浜崎さんが利用された広辞苑では「じんしゃ」となっているのですね。

浜崎　えー。

平田　広辞苑も第二版以降は「じんじゃ」に変っているのです。現在、日本の辞典類は全部「じんじゃ」になっています。これは以前説明したことですが、「社（じゃ）」と読むのは惣社と神社しかありませんから、惣社が登場する鎌倉時代以降に「社（じゃ）」というように変ったと考えることが出来ます。「じんしゃ」という古い日本語を守っているのは鹿児島県だけということです。だから、開聞神社（かいもんじんしゃ）なんていうのは、古い表現が残っていると理解してよいのではないか。

浜崎　それで、仮名が付けてあるのですね。

平田　それと同じようにキヒレ・キイレとかイフスキ・イブスキ。時代がくだると濁音が濃厚になって来るのじゃないでしょうか。鹿児島の言葉・地名には古い日本語が残っていると考えていいのじゃないでしょうか。

浜崎　なるほど。

平田　浜崎さんが「じんしゃ」か「じんじゃ」かという問題提起をされたのですが、まとめてみて実によい問題提起をされたと考えます。

納　周圏論の解釈はいいわけでしょうね。方言周圏論というもの。

平田　それはありうることだと思います。とくに鹿児島の場合は古いのが残っているのですね。だから国語辞典にある表現がすべて正しいとは限らないと、鹿児島から主張していいと思いますね。

浜崎　学問も中央集権だから。

納　以前、鹿大におられた上村孝二先生が説明されたことは、鹿児島の方言の場合、鹿児島本土と種子島と屋久島。この三つを比較すると、種子島の言葉だけが変っているのです。屋久島と鹿児島本土とは大体同じですね。それと、甑島と種子島の言葉が似たところがある。これらを考えた場合に方言周圏論と大いに関係しているのではないかと考えるのです。種子島には種子島の言葉が、どーんとあって、あんまり他からは影響されん、と。屋久島の場合は屋久杉なんてのがあって、いろんな人々があすこには行ったり来たりで、鹿児島本土から来た言葉が混って屋久島方言を形作ったのではなかろうかと私流に解釈しています。上村先生は周圏論から考えて、鹿児島語の一番の元祖は種子島にあるのじゃないかなといわれます。鹿児島語での朝の挨拶「こんちゃらござした」というでしょう。あれは「今日はまだでした」という意味じゃないかと私は思うのです。

浜崎　いけん言うとですか。

平田　こんちゃらござした。

納　種子島に行けば「今日はまだめっかり申さんと言います。「まだお目にかかり申さん」と。同じ「お目にかかりません」が変化したのが「こんちゃらござした」じゃなかろうかと私は思っています。

平田　小川先生。甑島の人たちが種子島に移住していますね。

小川　えぇ、私の親戚もおりましてね。「小川」というのですが。台風で甑島全体がやられて移住しているのですが。

平田　あぁ、そうですね。

小川　それで、言葉ですけど。おっしゃるように種子島の言葉は甑島の言葉に似たところがありますそして、島原半島ですね。それとも似ています。最近、雲仙普賢岳で、あっちの言葉がよく出ますが、これもまた甑島の言葉に似ている。どうも天草の方と海上交通の関係で言葉も伝わったのじゃないかとそんな感じがするのですけど。

納　甑島の何という方でしたかね、名前を憶えていないのですが、頭髪を伸ばしてですね、昔のいわゆる武芸者という感じの人。

小園　塩田さんじゃないの。

納　あぁ、塩田さん。あの人はですね、甑島の文化というのは全部北から入って来たのだと、北方説を以前から唱えているのを私は聞いたことがあります。今おっしゃった島原半島辺と、そうとう往来があったのじゃないでしょうか。

平田　島原だと、天草ともつながりますね。

納　私がいつもいうのは、鹿児島にもあるじゃないか、天草にもあるじゃないか、島原にもあるじゃないか。「ハンヤ節」。あれは何か根拠があるのじゃないかと私はいつもいうのです。

平田　海上交通で流れて来たのでしょうね。

平田（功）　島原には○○ハンヤ節というのが、あっちこっちにありますね。

小川　牛深ハンヤ節からじゃないですかね。

片岡　阿久根の衆は、阿久根が元祖という。

小川　あぁ、そうですか。

片岡　牛深は阿久根からの船便がある。

平田　なるほど。

建部神社

片岡　先程の神社(じんじゃ)のことで、照国神社(てるくにじんじゃ)とか松原神社(まつばらじんじゃ)とかいうのは、われわれの小さい頃は聞いたこともないのですね。順聖院様(じゅんしんさぁ)とか、「ダイツさぁ」とか、鹿児島神社を「ウッセさぁ（宇治瀬神社）」という呼び名で呼び、「まつばらじんじゃ」とか「まつばらじんしゃ」という呼び方をする人は殆どいなかった。「ダイツさぁ」「ダイツさぁへ行っど」「ジュンシンさぁへ行っど」で、照国神社のことは「南泉院馬場(なんしんばぁ)」とか、「ウッセさぁで待っている」とか、そういう言い方で「じんじゃ」という呼び方はなじめなかった言葉じゃないかと思うのですが。

平田　いわゆる大東亜戦争以後でしょう。

納　そうおっしゃれば私もそう感じます。私の所は武ですが、建部神社があります。「たけべじんしゃ」か「たけべじんじゃ」か、どっちが正しいか分かりませんがね。今でも、ひょっとしたら「でめじんしゃ」と言いますよ。

小園　デメさぁ、と言いますよ。

納　えぇ、デメさぁ。

平田　大明神ですね。

納　最近では、武大明神社と書いてありますね。

平田（功）　私たちは諏訪神社(すわじんじゃ)のことは「おスワさぁ」と言いますね。いつも、そんな感じでしたね。

平田　鹿児島では「様」を付けて「さぁ」と呼びますね。

納　その建部神社の起こりが、えーと、根占。

平田　えぇ、根占ですよ。

納　根占にありますね。根占から高麗町へ渡ったらしい。そして高麗町から現在の所に移った。高麗町のどこにあったのか、高麗町の人たちに聞いてみたんですが、「うんにゃ、知らん」という。

平田（功）　それはどっかですね。私は高麗町にちょっと住んでいたことがあったのですけど、出張して来て、六月灯があるのです。

納　それは聞きました。

平田（功）　本通りのですね、えーと高麗橋を背にして左側。納病院のもちっと向うの、はずれにありました。

納　武之橋から川のついを渡って、上せぇ上って行く道が－－－－.

平田（功）　今もあるんですけどね。

納　神社(じんじゃ)そのものは、なかふうやんでな。

平田（功）　はい、ないですよ。

納　どけあったとか、聞くのですけど。

平田（功）　出張して来やっですよ。

平田　御旅所でしょう。うーん、いろんなのが出て来ますね。他にありませんか。

根占＝西目説

小川　根占は西目であるという説があるのですよ

平田　西目ですか。

小川　西目という所がありますね。

平田　東目・西目という、あれですか。

小川　えぇ、それですよ。

平田　それなら、分かりやすいのだが。

肥後　そうですね。ニシメならば。

平田　ニシメがネシメに変化した。それは理解しやすいですね。

能勢　西目という表現はいつ頃からですか。東目に対して西目という表現。大隅半島で、よく西目といわれますけど。

肥後　古いのじゃないですか。

平田　「目」というのは古い地名語尾ですよ。

江之口　13世紀には、根占南郷というのが出て来ます。これは正八幡宮の御料地があって、そこの地頭職に建部氏が代々世襲する形になっています。それ以前はちょっと分かりませんけど。

平田　和名抄にも禰寝が出て来るわけだから、もっと古いことになりますよね。ニシメからネシメに変ったという説を理解しようとすれば。

能勢　「西目」という言葉そのものが文献に出て来るのか。そういう俗称でしょうかね。

平田　鹿児島でいう場合、薩摩半島が西目で大隅半島が東目です。

能勢　そうですね。そう言ったものが、何か文献に出ているのか。

平田　どうだろうか。川内に「上目(ウワメ)・下目(シタメ)」という言い方がある。国府とか国分寺がある高い方を「上目」といい、低いところを「下目」というのです。

納　大隅半島の人は、西側からの移住者が多いらしいですね。

能勢　それは、そうです。大体、藩政時代が多いですよね。西目から東目に移ったというのは。

平田　家内の実家も西目から移って行ったといいます。

松浪　小松帯刀なんかは、その反対ですね。

平田　えぇ、反対です。それは配置転換ですから

納　反抗できないようにしている。

平田　そういうねらいがありますね。

江之口　この辺は串良とか何か妙な地名がありますね。

平田　古い地名が多いですね。

松浪　一種の開拓地でしょうね。

能勢　そうですね。開拓地ですね。

納　とくに鹿屋、それと串良。あの辺に行けば、「堀」だらけですね。

能勢　そうですね。「堀」が多いですね。

平田　ちょっと休憩しましょう。

鹿児島方言でみた地名

納　栄蔵

納です。よろしう頼んみゃげもんで（よろしくお願いします）。そけけちゃっとを（そこに書いてあるのを）、こういう名前を、皆せしこやっちおめもんどんから（皆さん、ちょっとばたばたするのではないかと思いますが）、納(おさめ) と言います。納という地名は、これは地名があります。兵庫県の洲本市に、「納」という集落があります。これはとくに郵便番号が設定してありますから、だいぶ大きな集落ではないかと思います。それから長崎県の五島列島の北の方に、納島(のうじま)という島もあります。人はあまり住んではいないようですが。生まれ育ったのは「武」です。小学校は中洲小。ナカシガッコウです。自己紹介は一応これぐらいにして。

大体、地名というのはもともとは方言でいわれておったものに漢字をはめ込んだものじゃないかなと私は思っております。北海道とか南西諸島に行くと土地の言葉をそのまま漢字にはめ込んだのが相当あります。「なんち読んだーろかいな」と思うような地名が沢山あります。とくに北海道の場合にそれが多くみられます。琉球列島に行っても、それは沢山あります。その次に難しいのが鹿児島です。鹿児島の地名も鹿児島方言でいうもんですから、分かりにくいわけです。

現在のように地名を漢字で表わすようになったのは、和銅年間の御役所からの達示によってでした。土地の名前は佳い字を使って二字以内におさめなさいというお触れが出ているらしいのです。その関係で、全国を見渡した場合に、大体二字に統一されているようです。鹿児島の場合、昔はこういう書き方をしていたのです。普通「鹿児島」といえば三文字ですが、「甕島」と、これを一緒にくっ付けるわけです。昔の新聞なんかを見ると、お偉方が鹿児島に来やったということを「来甕」と見出しがついておるんですね。甕に来る、と。これを「ゲイ」と読ましている。これを使っている自動車学校があります。冷水峠を登りきって下に降りる所に玉里団地がありますが、あそこに自動車学校があるのです。「甕城自動車学校」と書いてあるのです。昔はこういう「甕」を使っていたのです。鹿児島を二字にしなさいということで鹿児をくっ付けとるわけです。これを「甕島」と読ましているわけです。

これに似たようなことが他にもあります。まず、出水です。イズミは普通「泉」と書きますね。鹿児島だけでなくて、これは全国的にそうです。大阪に行けば「和泉市」というのがあります。「和泉」を「イズミ」と読ませているわけで、「泉」一字でも「イズミ」。鹿児島でもあります。指宿に行けば、「今和泉」というのがあります。鹿児島市内にも現在はありませんが、戦前、鹿児島駅の前に和泉屋町という地名がありました。ちょうど日通の事務所がある一帯を、和泉屋町と言っていました。小さい頃は何故「和泉屋町」を「イズミヤチョウ」と読むのか不思議に思っていました。「泉」から来ているのが出水郡の「出水」。出水と書いて「イズミ」と読ましております。

それから、もう一つ、頴娃。漢和辞典を見ると、「頴」一字で「エイ」となっているわけです。現代中国語では「イン」というらしいです。「娃」の漢音は「アイ」です。これも現代中国語では「イン」と読むらしいのです。また「頴」というのは中国の河の名前らしいのです。「娃」の意味は、美しいとか、見ばえがよいとか、美人という意味をもっているらしいです。また「頴」は「植物の穂先」とか、「ウラ」とか「末」という意味をもっているようです。一字でも「エイ」と読むのを、わざわざ二字にせよということで、「頴娃」としたのじゃなかろうかと思います。

さらに頴娃郡は、『続日本紀』では「衣」と書かれています。「衣評（エノコホリ）」。「衣君(エノキミ)」というのもあります。和名抄になって来ると「江乃」が書いてあるようです。薩摩国図田帳になると「頴娃」が出て来ます。もともとは「江」であったのがいろいろと書き換えられていったのじゃないかと想像するわけです。

本論に入ります。鹿児島方言の特徴というのは、音がからっと変って来るわけです。子音でもなるし母音でも変って来ます。鹿児島の場合、共通語式に言えば「カゴシマ」ですね。しかし、あたいどま「カゴシマ」とははっきり言いもはんな。言えば、まず「カゴイマ」、それから「カゴマ」。子音だけいう場合もあります。「カゴッマ」「カゴンマ」というふうに聞く場合もあります。この音が両方あるのじゃないでしょうか。

平田　「カゴンマ」というのは聞いたことはなかなぁ。

納　このmの変化。それからnの変化。今朝もテレビで見て来たのですが、郵便局の簡易保険を「カンポ」と言いますね。kampo と私は思っとったのですが、テレビの字幕にはmじゃのしてnが書いてあるのです。こうしてkanpo と読ましている。東京の駅に行くと、新宿と新橋。新宿の場合はnらしいです。新橋の場合はmらしいです。この次に続く言葉が－－－。

平田　p,b,はmです。

納　次に来る子音がですね、口を閉じていう場合はmになって、口を閉じん場合はnになるらしいのです。それで、鹿児島の場合にも、いろいろ言い方があるわけです。「カゴイマ」「カゴシマ」「カゴッマ」「カゴマ」

平田（功）　「カゴヒマ」がある。

納　あぁ「カゴヒマ」がありますね。

平田　えーっ？どこの言葉ですか。（笑い）

納　カゴヒマ。はっきり「ヒ」とは言わんですよ軽くカゴヒマというのです。この「ヒ」は「シ」の変化じゃないかと思うのです。というのは、方言の場合、とくに東京方面の奥さんたちゃ「ヒ」の発音が出来んとですね。「火(シ) が燃えてる」と「ヒ」を「シ」というようです。東北に行くと「シ」が「ス」になるのです。「おスス」に「スンブン」。鹿児島の場合、両方とも使うようです。日置(ヒヨッ)の場合「シヨッ」と、聞いたことはなかしか。

平田　日置郡(ヒヨキグン) は、なかなぁ。

納　なかですか。向かいの牛根、それからさっきの根占。あすこん場合、ウシネという人もおれば、ウイネ。

平田　ウイネはいるね。

納　ウイネ。それから大根占に来れば、ネヒメ、オオネヒメ、コネヒメ。「ヒ」という発音になりますね。牛根はならんごたっですね。

それから母音で大きな変化をするのが、同じ音が続く場合の省略があります。例えば、原良。私なんか「ハララ」とは云わんですね。「ハアラ」と言いますね。そげん云わんけ。ハアランタンボ。それから馬場は「バァー」というでしょう。千石馬場（センゴッバァ）・高見馬場（タカンバァ）・馬乗馬場（ウマノイバァ）とどちらか一つはずすわけです。一つがなくなっていうちょっとです。

それから国分にある川跡。市役所がある、どこかあの辺じゃごわはんけ。あすこは「カワト」といいます。字を書けば「川跡」Kahaato 。これを土地の人は「カアト」といいます。ア行・ハ行・ワ行の音は、三つに分かれて来る。haがwaになって、waがaに変って来ます。小学校に行く頃、「わたくしは」と、小学校の１年生にはどげんしてん分からんとですね。丸暗記です。よく分かるようになってからゆっくり見てみると、haはwaに変化するわけです。

読むときは「わたくしwa」と読ましといて、書く時は「わたくしは」と書けというのですから難しい話なのです。それからwaが aに変化するわけですね。それでkawatoと母音が三つ連続するわけです。このために一つは「アト」ともはっきり云わんですね。「カアト」と言います。ト:to もはっきりオまでは云わんと思います。母音がなくなるのじゃないかと私は思っとるのです。国分の人たちに云わせれば、「カアト」という。「カアトオ」とは云わない。「カアト」とオ(o) が出て来ても軽く出て来ます。

それから、これは順番が前後しますが、上から2番目、原良の下の百引(モビキ)。漢字で書けば百引。モモヒキを一字落として「モビキ」というわけですこれは牧園にありますが、宿窪田。「シュッボタ」ど土地の人は言います。「シュククボタ」の「ク」が促音になっているのです。

さっき言った馬場、それから川原(コラ)。上之園町の肥田殿川原を例に出してありますが、小さな石碑には「ひだどんかはら」と書いてあります。私なんかは川原を「コラ」と言います。kawaraはwaがなくなって、音が移動して来るわけです。「私は」はwaになるし、waは aになる。ワ行音の場合はほとんど w がなくなって来て、最後の母音だけでいう場合があります。そのためにア行音に変化するのが多いのです。

今度は、音が変るのがあります。音が変るのは「a+i」、これは「e」に変ります。「o+i」、これも「e」に変ります。母音のアとイが連続すればエに変り、母音オとイが連続すればエに変化します。「アとイ」から申しあげると、鹿児島市の西田町と常盤町の境に「ススケ橋」というのがあります。「ススケ橋」というのは「筋違橋」が訛って「ススケ」になる。スジカイsujikai ですね。鹿児島ではカイをケといいます。ご存知のように「ケケケ行たか」、「どけ行っとよ」「ケケケ」。このケはカイですね（笑い）。意味は違いますが、カイ：kai 、母音と母音が連続すれば、エに変化します。スジケ。ジの場合は、鹿児島では「ジ」はよく清音になります。火事をカシ。用事をユシがあっで、と言いますね。それで「スシケ橋」。

それから「ケションスッ」というのがあります。石灯籠の春田屋と、それからこっち丸屋の跡は何と言いますか、三越ですか。三越の南側。あすこにある裏通りが「ケションスッ」と言います。もともとは「会所之筋」ですね。この会所が、ケショになるのです。kaisho、アとイですからエになってケショ

私は以前から思っているのですが、吾平山陵のある吾平(アイラ)。あすこを、こっちの人は吾平(アイラ)。それと大姶良。これを土地の人は、若い人は反対しますが、昔からの人はこれを「エラ」と言います。大姶良もオエラといいます。アとイがエに変り、ラはそのままですから「エラ」、これはオが付いて「オエラ」になるだけです。

それで、こっちの姶良ですね。ご存知？聞いたことがなかいやんどかい。姶良郡の衆で、わがえんとこいをば「エラグン」という人は、聞っきゃったことはごわはんか。

平田　うんにゃ、姶良郡はエラグンとは云わんですよ。

納　やっぱい、アイラグンとゆもんさなぁ。

肥後　聞きませんんね、姶良郡は。

納　大姶良・吾平の場合は、エラと言います。吾平山陵は「エランサンリョウ」と言うんです。若い人はこうは言いませんが。それから問題になっている五石橋の一つ、高麗橋。これは普通に書けばkorai ですね、コーライ。これを私なんかは、コレと言います。橋を付けると「コレバシ」。aiは eに変化するのですね。あすこの町を、コレマチ。それから、コレガシ（高麗菓子）。

平田（功）　コレモッ（高麗餅）とかコレガシ（高麗菓子）と言います。

納　コウライ菓子とは云わんでしょう。コレ餅というでしょう。

平田（功）　今の人たちは、コウライといいますね。私たちは、コレモッと言いよったです。

浜崎　今も売っていますよ。コレ菓子は。

納　今話したのが、ａ・ｉの変化ですね。ｏ・ｉの変化もあります。ｏ・ｉも、ｅに変化します。それから、国分には台明寺(ダイミョウジ)がありますが、これを「デメシ」と言いもんさなぁ。あれは、なんちうけ。郡山か？

平田　郡田（クイダ）。

肥後　郡田の奥。

納　あすけ、あんがな。

肥後　台明竹（デメダケ）。

納　それから、川内の場合は、センデ。焼酎の宣伝で出て来る、五代。土地の衆にいわすれば、ゴデと言もんさなぁ。これも、ａ・ｉの変化ですね。

今度はｏ・ｉの変化になります。ｏとｉとが連続した場合、これもｅになります。例えば樋之口(テノクッ)。共通語式に読めば「トイノクチ」です。もしくは「ヒノクチ」。音読みにすれば、樋は「ヒ」。訓読みにすれば「トイ」になります。数年前、ＭＢＣが出した市内の地図帳があります。あれには、こう書いてあるのですよ。「タイノクチ」なんぞ、と。テノクチの場合、こういうことがありました。私が以前いた会社に国鉄職員が派遣されて来た時期がありました。国鉄の解散時期でがたがたしとって、各地に国鉄職員を派遣していた時代があったのです。北九州から来た人たちが、電気がつかんので来てくれというのです。どこごわしかというと、タイノクチだというのです。本人さぁは「タイノクチ」と信じきっているのです。この人が、この「鯛」を書いた。（笑い）。この字を知らん人は恐らく鯛之口と書くと思います。知っている人は樋之口と書くと思います。この「樋」というのは、oiが連続すれば eになりますから、「テ」になるわけです。この例は方々にあります。屋久島にも「樋」の付いたのが、相当あります。樋(テ) と読んだり、樋(ヒ) と読んだりしています。これは『鹿児島県地名大辞典』（角川）から拾い出して来たものです。大口市の大島という所に樋掛(テカケ) という小字があります。大樋掛(オオテカケ) 、それから樋之口(テノクチ)というのもあります。姶良郡吉松町の中津川に樋掛という集落があります。鹿児島市の岡之原(オカンハイ) に樋之丸(テノマル)という所があります。伊集院町郡にも樋掛。

その次に、川辺郡大浦町に「ゲジマ」という所があります。昔は海だった所ですが、埋め立てられて島はなくなっていますが、恋島と書いて「ゲジマ」と読まれています。「コイ」が「ケ」になり、さっき話になった「じんしゃ」と「じんじゃ」との違いのように「ゲ」に変化したのではなかろうかと思います。

それから、コッテ。コッテウシ（牡牛）のコッテです。コッテウシのことは書いておきましたが、この字から来たんじゃなかろうかとも考えるのです。コッテウシを「特牛」と書いてあるのもあります。大隅半島では、コッテとは言いません。コッチと言います。大隅半島では toiの母音連続は「チ」になります。コッテ牛はコッチ。それから「太い」は鹿児島じゃ「フテ」と言もんさなぁ。大隅では「フチ」といいます。「フテもんじゃ」が「フチもんじゃ」になる。oiが大隅半島では iに変化します。特牛(コッテ) という地名が出水郡野田町にあります。山口県には山陽本線に「こっとい」という駅があります。そのコットイが鹿児島ではコッテになるのです。kottoi.oi がe に変化するんですね。

鹿児島では昔ようありよった妙円寺さぁ詣り。あすこに今でもあんさなぁ。横井の町。昔はあれをヨコイとは言いません。ヨケ、ヨケンマッ。yokoi

のoiが eに変化するのです。yoke。昔だけでなく、今でも伊集院詣り：妙円寺詣りの途中の休憩場所というのですかな、妙円寺さぁ詣りに行けば、こっちの農協前ではお茶を飲まっしゃいし、ちょっと行けば、そばなんか売っちょいやんさな。

さっきのa・i の変化にかえりますが、伊集院に行けば「ベラッ」というのがあります。梅落(バイラク)が「ベラッ」となるのです。bairaku が berak。これは促音になります。

それから、eiというのが eに変化するのですね。昔、伊敷にあった四十五連隊の前の国道筋、昔の軍隊は営門と書きましたが、現在は栄門と書きます。eimon.eiがe になった。土地の人は栄門通り(エーモンドウリ)といいます。鹿屋に行けば昭栄町(ショーエーチョウ)。場所は、昔の鹿屋駅。今の市役所の前から旧市役所の方へ通っている通りがある。その町を昭栄町とか昭栄通りといいます。普通にいえばショウエイチョウ、ショウエイドオリでしょうが、エイをエーと表現します。それから、頴娃。頴娃語、いわゆる英語じゃなかんどんから、あすこん衆は頴娃語が上手じゃんどなぁ。頴娃の場合、イがぬけてエーだけ残ったんじゃないかなと思います。

それから、オーと引っ張る音がありますが、このオーは短い「オ」になったり、「ウ」になったりします。「ウ」に変る例が、大口市に大島という集落があります。大島(オオシマ)というのを「ウシマ」といいます。それから、吉野の下の大崎鼻（ウサッバナ）。国分市郡田を「クイダ」といい、大口市郡山を「クイヤマ」といいます。焼酎で有名な所です。神社の修繕をするのに建築主がけちやったもんやっで焼酎一杯飲ませんじゃったという落書のある神社のある所です。私はクイヤマと聞いて、何という地名やろかいと思って、クイヤマてどこよ、字はいけん書っとよと聞けば、郡山と書いてクイヤマと言っているのです。それから掛宿郡のあの駅はＪＲでは一番南になるのじゃないですかね。大山という駅がある。これは「ウヤマ」という。明治時代の陸地測量部の地図に「ウヤマ」と振り仮名が振ってあります。それと、伊集院町神之川の下の方にある大田（ウタ）。鹿児島市内に面白い地名があります。土地の衆にいえば叱らるっどんから、下荒田町に貧乏小路と書いて「ビンブスッ」と読ましている。場所は八幡小学校の角から北にあがった筋がビンブスッといいます。

オーを「オ」と短くいうのが、草牟田(ソームタ)がソンタ。大根占(オオネジメ) がオネイメ。それから郡山をコイヤマというらしかんさな。鹿児島市中郡(ナカゴオリ)をナカゴイ。それから、石灯籠(イシロ) とか弓東郷殿小路(ユンゴドンノスッ) とかあります。まずイヅロから。仮名で書けばイシドウロウですね。それからイシヅロに変り、これがイヅロになる。シ音は、よう消される傾向があるんです。カゴシマをカゴイマ。ネシメをネイメ、ウシネをウイネ。「シ」をはっきり云わんのです。母音が二つ続く場合は、どちらか一方をはずします。イシヅロがイヅロになるわけです。弓東郷殿小路というのは、平田橋のこっちの角に石油スタンドがありますね。その裏側が平田公園になります。平田公園の脇の通りを弓東郷殿小路といいます。Yumi Togo.miの場合は、よう nになります。神様でなくて、カンさぁ。弓の場合はユン。トウはツに変り、ゴウは短呼されて「ユンツゴドンノスッ」というふうに変化します。

平田　はい、あとは討論にしましょう。

納　子音の変化は、またの機会にさせて下さい。

平田　どうもご苦労さまでした。それぞれの土地の表現を漢字で表記したものが地名の表し方だとみるのが一般的な解釈です。鹿児島語の場合、漢字の表記がいつ方言に訛ったかという問題が出て来るわけです。その両方をきちんと分けなければならない難しい問題があります。例えば、センデという音が先にあって川内という漢字を当てたのでは、センデで解釈しなければならんわけです。五代(ゴデ)が先ならば、ゴデ。そこらあたりは、音が訛ったとみなければ地名の解釈はできない、と思います。その区別がつかないのは、大島のウシマとオオシマ。大崎のウサッとオオサキ。このような部類の中で分かりやすいのは、宇都(ウト)と大都(オオト) だと思います。大戸という地名の古い形は宇都なんだというふうに解釈すれば「ウ」という表現が古い日本語の表現で大戸は新しいと解釈すれば理解し易いわけです。

倒えば伊集院の大田。「ウタ」という地元での表現が古く、それを新しい時代になって「オオタ」というようになったと解釈する方が自然であり、大田を鹿児島弁で読んで「ウタ」というんだと、一概に言えないのではないか。

納　それはおっしゃるとおりです。確かに吉野の大崎と曽於郡の大崎とは、同じ字を書いてウサッとオオサキ・オサキです。「オサキ行たっ来っで」と大崎をオサキといいます。こっちじゃ、ウサッ。伊集院の大田もウタ。大口の大島をウシマという。

平田　一般的なことをいえば、鹿児島ではオオカゼが吹いたとはいわずに、ウカゼが吹いたといいます・その場合、オオカゼをウカゼと言ったと解釈するのか、ウカゼというのが古い表現で、新しい時代になってオオカゼになった、とするかですね。この方がよさそうな気がするんですがね。

納　私はこういうことも考える。奄美大島、いわゆる南西諸島に行けば、オの母音がなくてウに発音する。沖縄の場合、ウチナーと言いますから。

平田　ウチナーですね。

納　周圏論から考えると「ウ」が古いのじゃなかろうか、と時には考えるのですよ。

平田（功）伊集院に、大迫畑と書くのですけど、私たちは「ウサコバタケ」と言っていました。子供の頃、兎をイメージするもんだったですけど。

納　「ウサッバッケ」とは聞っきゃらんかったですか。

平田（功）　「ウサコバタケ」と言いました。

納　大隅半島に行けば唐芋畑を「カイモバッケ」とか麦畑を「ムギバッケ」と言います。大隅に行って聞っきゃったことはごわはんけ。

平田　はい。どんどんおっしゃって下さい。いろいろなことが出て来るでしょうから。

平田（功）　ウサコバタケという所は、先程話になったヨケンマチ（横井町）を通って、いよいよ伊集院の町に差しかかるあたり、伊集院の線路よりもうちょっと土橋寄り。清藤なんですよ。キヨフジのことを「ケーフッ」と言いますから。清藤さんという苗字もよく聞きますけど、大字・小字でもないようです。

納　ケーフッですか。

平田（功）　はい、ケーフッのだいそれとかね。

平田　それはキヨフジの訛りでしょうね。

平田（功）　そうです。

納　フジは完全に「フッ」ですね。ジはですね。促音になります。イ列とウ列は促音になる率が高いのです。

平田（功）　キヨフジ・キヨフジと言うたちピンと来ませんでした。ケーフッと言えばピンと来るのです。

平田　ちょっと割り込みますが、以前書いたことがあるものですから。中世の職業を示しものに網屋とか紺掻とか経師というのがあります。経師の場合昔は「きよふじ」と書くのです。これに「清藤」という漢字を当てたのだと思ったのです。そのように考えたら、昔はこの辺に経師屋（表具師）がいたんだなと考え易いのですね。紺掻とか経師とか網屋、こんな地名は少ないもんですからね。清藤はこれから変化したのだなと思っているのですが、ケーフッとなると「きよふじ」が訛ったんだなと解釈せざるを得なくなるわけです。

納　キョウ。昔は、小学校の頃「今日」というのは「けふ」と書かされよったですね。

平田　はぁ？

納　「きょう」のことは「けふ」

平田　それは「今日」だ。

納　これと何か似た用法があるんじゃないですか。

浜崎　うゐのおくやまけふこえてーーー。

平田（功）　「けふ」というのはあれは別の言葉。

納　小学校の１年生の国語読本に、「けふ」と書いて「きょう」と読めというのですね。

平田　それとは違うでしょう。ケーフッは方言。

平田（功）　あれはケーフッと言います。

平田　他にありませんか。次のグループが来て待っているようですが。

片岡　私は東郷殿小路に、少年時代、20年ぐらい住んでいたのですが、弓東郷殿小路(ユンツゴドンンノスッ)というようないい方は聞いたことはなかったのですが。それで、恐らく示現流の東郷どんは刀の方ですから、同じ東郷どんでも弓の東郷どんという意味で弓が付いたのがツゴどんになったのではないかと。弓がないと、ただ、トウゴウどん。少年時代、ツゴどんというのは聞いたことは全然なかったのですが。

納　この弓東郷殿(ユンツゴドン)はですね、この流れが出水の何というけ？

平田　腰矢？

納　あれの流れらしいという。

片岡　もちろん、そうですよ。弓の師匠どんじゃったわけですから。弓を付けるとツゴどんになる。弓をとると、トゴどんになるのじゃないか、と。

浜崎　私の生まれた所は石垣です。これは現在は「イシカケ」と言っているのです。最近、開聞神社の棟札の中に「いしかけ（石懸）」とあるのが出て来ました。年代もこまかいことは忘れましたが大体八百年ぐらい前に、すでに「いしかけ」という言葉があったことが分かりました。

肥後　先程、下荒田に貧乏筋というのがありましたが、国分にもあるんです。場所は唐仁町に近いのです。それで「瓶宝」と書く。瓶を作る人がいた。その頃は、まだ瓶は宝でしょうから。

平田　なるほど（笑い）。

納　ビンダカラやな。

肥後　えぇ、瓶宝。現在、国分の地名で、これが問題になっています。何かいい御意見をお持ちの方がありましたら教えて頂きたいと思います。

納　あの辺で、そういう醸造業のさかんな所があったのですか。

肥後　醸造ですか。

納　瓶といえば、恐らく焼酎か。そういうのを造りよった所が。

肥後　壺じゃなくて、ガラスの瓶。唐仁町に近いのですよ。

納　唐仁町が？

肥後　それに関係があるんじゃないかというのですけど。

平田　話はつきないようですが時間になりました。次回は山崎さんに頼んでありますが都合がつくかは未定です。そこで一つ、提案。こんなことをやってみたいのです。麓には野町が付いています。野町から成長したのが本町だと思います。ところがこれをホンマチと読むのとモトマチと読むのと二通りあるのです。それぞれが知っているホンマチとモトマチを出しあったら、鹿児島県のホンマチ・モトマチの区別がつくのじゃないか、と考えるのです。これはそれぞれの土地の人でなければ分からないのです。皆、自分が住んでいる所の呼び方で、ホンマチが正しいと思っている所、モトマチが正しいと思っている所がありますので、次回はホンマチ・モトマチを出しあってみたいと思います。今日はこれで終りとします。

方言で読む鹿児島の地名

平成６年３月６日
鹿児島地名研究会例会
納　　栄　蔵

地名はもともと、我々が、昔から使用している方言を母体として、命名されたものであります。このようななかで北海道、南西諸島に次いで難解なものは、鹿児島の地名ではないかと思います。地名は、それぞれの方言で伝えられたものに、漢字をもって当て字され、また和銅年間の詔勅および延喜式に、諸国の郡郷里の名は、好字を用い、みな二字とし、必ず嘉名を取れとされた結果であります。

１．母音の変化

鹿児島方言最大の特徴である、同音の重出による音韻の脱落、重母音連母音および長母音の、単母音化による音韻変化が、鹿児島方言であります。

(ｱ) 同音重出による音韻脱落

鹿児島市ハーラ（原良）町
曽於郡輝北町モビキ（百引）
姶良郡牧園町シュッボタ（宿窪田）
鹿児島市加治屋町馬乗バー（馬場）
鹿児島市上之園町肥田殿カアラ（河原）－－－－方言では一般的にはコラ
国分市カワ（ア）ト（川跡）　etc.

(ｲ) 重母音、連母音の音韻変化

母音ア（ａ）＋イ（ｉ）、オ（ｏ）＋イ（ｉ）、エ（ｅ）＋イ（ｉ）は、エ（ｅ）に変化する。

鹿児島市西田町ススケ（筋違）橋
鹿児島市大黒町ケション（会所ノ）小路（スッ）
肝付郡エラ（吾平）町
鹿屋市オエラ（大姶良）町
鹿児島市コレ（高麗）町
国分市デメシ（台明寺）

センデ（川内）市ゴデ（五代）
鹿児島市テノクッ（樋之口）町
日置郡伊集院町郡テカケ（樋掛）
川辺郡大浦町ゲ（恋）島
出水郡野田町コッテ（特手）　－－－　（註）
鹿児島市犬迫町ヨケ（横井）
日置郡伊集院町郡ベラッ（梅落）

鹿児島市下伊敷町エーモン（栄門）通り
揖宿郡エー（頴娃）町
鹿屋市ショエー（昭栄）町ショエー（昭栄）通り

（註）鹿児島県の大部分では、雄牛のことを「コッテ」肝付郡地方では「コッチ」と言います。これは、万葉集に「特負牛の三宅の崎に」、夫木和歌抄に「特負の牛の角さきの」、日本永代蔵に「特牛程ある黒犬」などとあります。また山口県豊浦郡に「コットイ（特牛）」、ＪＲ山陰本線にも「コットイ（特牛）」と言う駅もあります。出水郡野田町の場合、「特手（コッテ）」は牛と手が似ているため、もともとは牛であったのではないでしょうか。

(ｳ) 長母音（オー、０：）はウ（ｕ）に変化するか、短呼されてオ（ｏ）になる。

鹿児島市吉野町ウサッ（大崎）鼻
大口市ウシマ（大島）
国分市クイダ（郡田）
大口市クイヤマ（郡山）
揖宿郡山川町ウヤマ（大山）
日置郡伊集院町ウタ（大田）
鹿児島市下荒田３丁目ビンブ（貧乏）小路

鹿児島市ソンタ（草牟田）町
肝付郡大根占（オネヒメ）町
曽於郡オサッ（大崎）町
日置郡コイヤマ（郡山）町
鹿児島市郡元２丁目ナカゴイ（中郡）
鹿児島市イヅロ（石灯籠）ドーイ（通り）
鹿児島市ユンツゴドンの（弓東郷殿）小路

以上母音について書きましたが、方言では上記母音だけでなく、子音にも母音以上に音韻変化がありますので、今回はこれまでにして、次の機会にさせて下さい。

鹿児島市
納　栄　蔵